

成·壽

SEIJU

2002年

第34卷

冬号



佛法元来大智泉

仏法元来大智の泉

曹溪五派各全圓

曹溪の五派おのおの各全く圓なり

誰言雨雪分優劣

誰か云う雨雪優劣を分かつて

洞済同齊一水禪

洞済同じくひと齊し一水の禪

ロサンゼルス禪センターにて

故 安谷白雲老師



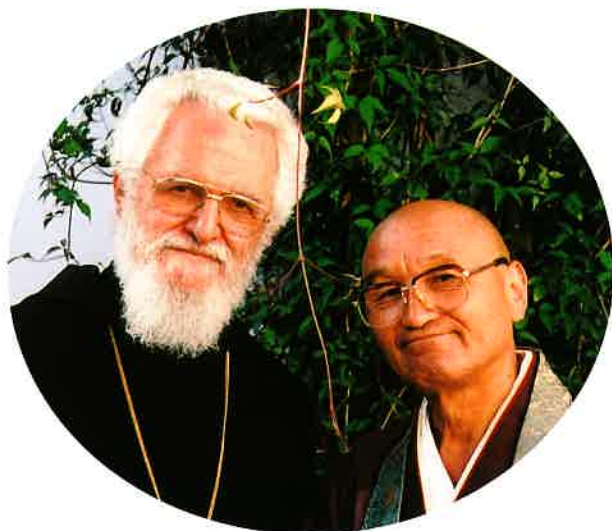
黒田武志住職、ドイツ・ニーダーアルタイヒ修道院にて講演



パネルディスカッションで熱く語る黒田方丈



会場をうめつくした熱心な聴衆



ユングクラウセン前ニーダーアルタイヒ修道院長とともに



ニーダーアルタイヒ修道院の庭を散策する黒田方丈



左からユングクラウセン前修道院長、一人おいて中川正壽老師、黒田方丈
(パネルディスカッションで)



ビザンチン教会の入り口にて



大悲山普門寺禅堂(アイゼンブッフ)での参禅会



参禅が終わり全員で記念撮影



アイゼンブッフ禅センター(普門寺)全景



庭から眺めた禅堂(左)とセンター事務所



黒田方丈と中川主監を囲み熱心に法話を聴く参禅者



普門寺に奉納された仏像三体

右から

跋陀婆羅尊者像（ばったばらそんじゃ）

韋駄天像（いたてん）

烏枢沙摩明王像（うすさまみょうおう）



アイゼンブッフ郊外を散策する一行

カ ラ 集	1	DOGEN 2002 ドイツにて熱く禅を語る	1
● ドイツ	15	高祖道元禅師二五〇回大遠忌記念ゼミナール	1
● 永平寺	29	大遠忌参拝団に参加して	29
カ ラ	33	黒田老師、午時諷経を奉修	33
● 特別読物	37	超神仏習合寺院出現とその社会的背景	37
● 特別寄稿	47	イスラム原理主義とテロ行為	47
ニ ユ ー ス	58	黒田住職産経新聞「この人に聞く」に登場	58
カ ラ	61	■ タイ 世界仏教徒連盟でスピーチ	61
● 連	82	■ くらしの中で読む『正法眼蔵』面授の巻・その八	82
● 特別寄稿	90	現代社会と仏教	90
カ ラ	97	■ 黒田武志老師・倫子令夫人祝賀会	97
● 特別寄稿	118	日本仏教における聖水 〈真言宗のケーススタディ〉	118
		ダンカン・隆賢・ウイリアムズ	
● 「国交樹立50周年記念」友好親善使節団・スリランカ訪問	131		131
● 平成十四年「成寿山善光寺総代会」	150		150
● 梅嘉庵 上棟式	152		152
● 松本密師講演	154		154
ニ ユ ー ス ・ ア ラ カ ル ト	157		157
新刊紹介	162		162
● 読者のたより	143	善光寺開創35周年記念行事のお知らせ	156
		題字・イラスト 伊藤三喜庵	

巻頭言

善光寺住職 黒田武志

「仏道をならうというは 自己をならうなり」

道元禪師さまの正法眼蔵からの一節です。私たちが仏の道を学ぶということは、実に自分自身を学ぶことだと教えていただきました。道元さまはかつて中国の留学から帰国されて、その第一声「われ彼の地において柔軟心を学ばん」といわれ、まことにこの柔軟心こそ人間にとって最も大事な心得であると遺しておられます。人間というものは、固定観念や先入観念、偏見などに捉われ、振り回されても

のを考えてしまいます。そんなとき自分の間違ったことに気づかず間違いを犯してしまうことが少なくありません。昨今、価値観の多様化や或いは希薄化から、よってたつ人間の尊い心までが失われてゆくことを私は危惧しております。道元さまの柔軟心を学ぶということは、人間としての最高の智慧、すなわち生き方の根本的問題を解決できる心を学びとることだと教えていただいているのです。

善光寺開創以来、私の信念と信仰は「宗祖を通して釈尊に還る」であります。この一年私にとりましても「いまここ」に全身全霊を傾注し過ごしてまいりました。慕古心に導かれ、奇しくも遭い難くして遭うことを得たり、道元禅師さま生誕八〇〇年、大遠忌七五〇年という大事に臨み、私は禅師さまを偲び大本山永平寺に拝登いたしました。道元さまがそこに居ますがごとく御前に茶菓湯を献じ、香を薫じる報恩御供養の「焼香師」を拝命致しましたことは誠に感謝に堪えませ

ん。さらには檀信徒総勢一〇〇名の方々とこの遠忌を無事に執り行うことができたことは、至極身に余る榮譽で終生忘れるものではございません。

二月には、曹洞宗特別奨励賞と大教師補佐、祝賀の大宴を頂戴し、また八月初頭ドイツ・アイゼンブッフ禅センター主催の「DOUGEN二〇〇二七五〇回忌記念セミナー」に招かれ、時に道元思想からみた現代思想へのアプローチを軸に、修証義の心を講演させていただきました。同時に行われましたパネルディスカッション等で、お釈迦様の諸行無常のお悟しや、禅師さまの今に生きる世界観に国境や民族、宗教を越えて共存共有できる心とその偉大さにドイツに居て、いまさらながら感得致しました。さらに十月タイ国ブッダモンthonで開かれた世界仏教徒青年連盟(WFBY)の招請で、タイ最高仏教指導者と青年僧多数を前に、日本仏教と道元さまの開かれた曹洞禅を講演させて頂きました。会場の輝いていた

青年僧の目の美しさは、今でも忘れることができません。会場での大反響に今さらながら道元禅師さまの「只管打坐」から発せられる二十一世紀へのメッセージは、南方仏教の伝播ルートを逆流し始めたのではないかとさえ観ぜられてなりませんでした。

この一年、私はまさに道元禅師さまに始まり、道元禅師さまに終わる、そんな思いを改めて感じさせて頂いております。善光寺も二〇〇三年五月には開創三十五周年を迎えます。育英会も二十年、成人に達します。これは私にとっても檀信徒の皆様にも大きな区切りであります。「年々歳々、咲く花は同じ、歳々年々人間同じからず」お互い様、残された人生と続く子孫代々への限りなき豊かさや幸せのため、大いなる仏教を通じてその役割と使命が果たせますようによい精進して来る年を迎えたいと祈願いたします。



DOGEN 2002

高祖道元禪師七五〇回大遠忌記念ゼミナール

宗門きっての実践家で、道元禪師を熱く讃迎する老師が修証義のこころを語る

平成十四年八月三日、黒田武志住職は、ドイツのアイゼンブッフ・禅センター（大悲山普門寺）主催による、「DOGEN 2002」高祖道元禪師七五〇回大遠忌記念ゼミナールに講師として招かれ、「道元思想からみた現代社会へのアプローチ―海外留学僧派遣の意義―」と題した講演を行いました。また、住職より「韋駄天像」「烏枢沙摩明王像」「跋陀婆羅尊者像」の三体が普門寺へ寄贈されました。

五日にミュンヘン郊外のニードーアルタイヒ修道院、七日にはデュッセルドルフのドイツ「恵光」日本文化センターで、デュッセルドルフ大学のベー前教授と共に、ドイツの皆さんと熱く論争を交わしました。

ドイツでの講演を終えて

善光寺住職

黒田 武志



大遠忌のいまこそ修証義の
教えを実践するとき

八月初頭、ドイツ、アイゼンブッフ禅センター
(大悲山普門寺) 主催の「DOGEN 2002
高祖道元禅師七五〇回大遠忌記念ゼミナール」
に招かれ講演する。のちパネルディスカッション
で発言を求められ、西洋人が仏教に何を求め



パネルディスカッション中の黒田方丈（ニーダーアルタイヒ修道院にて）

ているのか、パネルを通じて痛感するところがあった。道元禅師の大遠忌円成も近い今、そのことを念頭に禅師さまに思い致しながらお話しさせていだいた。

私を招いてくれたドイツ大悲山普門寺は、一九九六年禅センターとして開所。その後九七年大本山永平寺貫首宮崎奕保禅師を拝請開山とする允許を拝受、九八年には本堂・別館が落成した。開所以来、毎年のように永平寺から役寮の御老師方が訪ねている。僧堂として九九年二月に第一回の安居を修され、同寺主監中川正壽老師（慶応大学哲学科出身）は、八〇年以来、当地でその摂心指導にあたっている。パネルディスカッションには中川師とニーダーアルタイヒ修道院元院長のユングクラウセン神父、そして私が参加した。

中川老師が道元禅師の生涯と思想についてお話しし、私は修証義について述べた。

正法眼蔵の教えの中から短く分かり易い文章をもって人間が仏として生きてゆく具体的なあり方、すなわち方法と目標とその意義を明らかに説いた仏教のエッセンスであり、まさしく仏教徒のバイブルだと説明し、時代を超え、全てを超えた、他の宗門に類のない経典であること、さらに時代がどんなに変化しようとも変わることはない人間としての美しい生き方が示されている大切な経典であることを強調した。

ドイツには既に独訳の修証義が刊行されていて、多くの出席者の殆どがその修証義を読んでいるようだった。また、私が駒澤の大学院を修行し、本山総持寺と永平寺で修行を重ね、全国托鉢行脚ののちには、タイ・インドへ釈尊の足跡を訪ね、上座仏教に身を委ねる傍らキリスト教を中心とした西欧諸国を渡り歩いた行履を紹介、その行履の中から、僧侶としてその存在と使命を実感したことを申し述べました。



一見穏やかな雰囲気の中で講演が続いたが、会場がパネルディスカッションに移されたとき、雰囲気ガラリと一変し、出席者から唐突に質問があった。何を訊かれるのかなと思っていると、いきなり、修証義の第十七節を読み上



ニードアルタイヒ修道院で食事中の参加者

げ、「一体何を言っているのか」と問うてきた。因みに第十七節は、「諸仏の常に此中に住持たる、各々の方面に知覚を遺さず…」に始まり、「…其起す所の風水の利益に預る輩、皆甚妙不可思議の仏化に冥資せられて親き悟を顕わす、是を無為の功德とす、是を無作の功德とす、是れ發菩提心なり。」とあります。当然にして全てやりとりはドイツ語であり、私には日本女性のドイツ公認通訳士川路由美さんが協力して下さった。この人は仏教にも造詣が深く、私の書いたものは全て読んで承知しており、この日に備えてくれていた素晴らしい通訳者だった。そのことの安心があつて、思うがままに話が出来ました。まず私が申し上げたのは、「まさにこれがさとのことなんです！」と。この質問は、言葉の意味や解釈ではなく、本質の本質、その根源的な証悟である「さとり」そのことが何なのか、それを知りたいのだと感じたのです。今ここに

いるドイツ人が求めているのは学問としての修証義ではない。実践の書としての修証義の世界を是非知りたいのだと直感したのです。さらに私は言葉を続けながら、

「ここに花があります」と私は指さした。

「人はこの花を美しいとか美しくないと思う。けれど花そのものは自分が美しいとか美しくないとか、そんなことは何も考えていません。人間であるわれわれが勝手にそう思うだけのことです。そう思うのはこの私の『おのれの心』なんです。昼に食べたカレーライスがうまかったと思うのは『おのれの心』がそう思うだけで、カレーライスはそんなことちっとも思わない。カレーライスとしてそこにあるだけなのです。美しい、美しくない、うまい、うまくないという人間の意識でそこにあるのではない。花そのものの姿、カレーライスそのものの姿。人間と何のかかわりもなくそこに存在している。その

姿をありのままに見る、知ることが発菩提心であり、仏教に謂う『如実知見』、欲望や先入観や固定観念を捨てて見る心こそさとりであり人の喜ぶ心なんです」と申し上げますと、ドイツ人はスツカリ安心して得心の笑顔を頂戴しました。

ややもすると禅の専門家は道元の生い立ちや修行に終始し、生きてゆくうえでの実践につながらないもどかしさを、受け手は感じているように思えるのです。原理原則だけでは、全くとっていいほど西洋人には分からない。また専門家の方々が字句の説明を懇切丁寧に解説しても、彼らには全くとっていいほど分からない。分かるうともしない。ただ、仏教って何なんだ、さとりとは何だ、ということを実践を通し、現象の理を知りたい、知りたがっていると私は思っている。多分、多くの日本人もそれと変わらなものを持っていると思う。私の話は全て体験談、深くありません。しかし面白くもなく分か

りもしない話に拍手を頂いたことは私を驚かすに充分だった。それだけに道元さまの偉大さをいまさらながら感得しました。

「諸行無常」が釈尊の大原理の教え

拍手が止むともっと続けてくれというので、私は、インドのお釈迦さまが何を説かれたのか、出家前の釈尊の、四門出遊の話をした。これは生老病死つまり人間は生まれて老いてゆき、病気になるって死んでゆく、このことを釈尊は深く捉え、世の中は全てに移り変わりがあり、諸行無常なのだということをとおさしになった。これが仏教の最も大切な、根本の教えであり、修証義の眼目だからこそ、その第一章に「生を明らかに死を明らかにするは仏家一大事の因縁なり」と書かれてあるのだと説明したのです。

私は、「生とは何ですか、死とは何ですか」と会場に訊いた。誰も答えない。そこで私は「死

も生も同じなんです」と。「今は精一杯生きたら、明日とか何年先とかなんてないじゃありませんか」と。人間どんな生き方をしようとも結果は必ずついてくる、これが道理だったら人に喜ばれるように生きてゆこうじゃないか。もし、それでも悪を働いたら、そのときはどうするのか？ その人は懺悔をしましょう。懺悔滅罪は修証義の第二章である。以下三章受戒入位、四章発願利生、五章行持報恩までのさわりを話したのである。

話が終わると神父は「素晴らしい、よかった！よかった！」と喋って下さった。神父はかつて安谷白雲老師に学んだ人でもある。翌朝、私と顔を合わせた時道元さまの教えは素晴らしくとまた感激を露にしたのである。

さて、われわれ曹洞宗の僧侶は、既に八百年前に道元禪師さまから素晴らしい教えを戴いていて、あとは修証義に書かれていることを限り

なく実践することだ、と私は考
えている。七五〇回大遠忌に際
して、私たちが自分に確認すべ
きことはこのことであり、ただ
遠くを慮るだけではなく、そこ
に「道元さま居ますが如く」そ
のお心を頂き、理に従い「ただ
実践する」。高祖さまからその促
しを受けているのだと、心底そ
れを知ることだと考える。ひる
がえって曹洞宗の僧侶は何をす
るのかと問うと、只管打坐だと
いう。

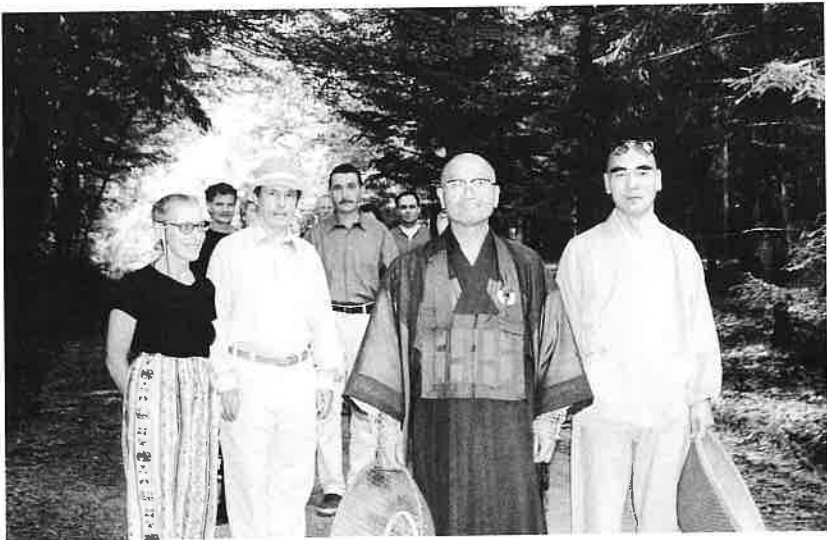
高祖（道元禪師）さまの禅は
ひたすら悟りを求める人、一箇、
半箇のための禅だったと私は思
う。太祖（瑩山禪師）さまの禅
は「檀信徒を神・仏と思いで…」



というお言葉に表れているように、
あらゆる人を包み込む禅だった。
そして、総持寺の二祖峨山禪師を
先頭に、数多くの優れた弟子たち
が草の根を分けて全国に散り、高
祖・太祖の教えを自ら実践して、
今日の曹洞宗を築かれた。つまり、
やはり宗門にとっても実践を旨と
する人材の育成が、これまで以上
に待たれているのである。

私は宗教法人横浜善光寺留学僧
育英会を昭和五九年に設立し、六
〇年第一回から海外留学僧を送り
出し、六十三年（第三回）から外
国僧を日本に受け入れている。既
に十八回に及んでいるが、これは
道元禪師の教えを正しく伝えるこ
とのできる国際的宗教者を育てな

ければならないという、私の大誓願による。横浜の地に善光寺が立てられてから僅か十五年後に発足した横浜善光寺留学僧育英会事業である。周囲は無謀に過ぎるといふ声ばかりだったが、私の誓願を信じて支援していただいた檀信徒のお蔭で今日まで続けられた。これも道元禅師さまの御法恩によるものと、大遠忌に際して改めて御報謝申し上げるところである。





普門寺禅堂

大悲山普門寺
アイゼンブツフ禅センター
について

大悲山普門寺・アイゼンブツフ禅センターは、大本山永平寺七十八世宮崎奕保禅師を開山として拝請し、日本曹洞禅の伝統に根付きつつ、仏教としての禅の本質を究め、またその教えを普及することを使命として、ドイツ南部に建立されました。

東洋と西洋の文化および宗教的背景の違いゆえ、ヨーロッパにおいては従来の伝統を単に形式的に継承することだけでは十分ではありません。それゆえ大悲山普門寺は東洋と西洋の肯定的総合を目指し、もって今日の要請に応えるこ



冬のアイゼンブッフ

とを目的としています。

地球一体化に一層の拍車がかかっている今日の世界状況にあつては、精神界においても地球レベルの覚醒と変革及び他の宗教や精神領域との接触交流の必要性が高まっているのです。

地理的、政治経済的にヨーロッパの中心であり、今後益々その重要度を増していくであろうドイツに基盤をおく普門寺は、ヨーロッパ発信の仏教文化交流活動に積極的に参与していくことを目指しています。

また現地社会に根付きつつ、現代世界の問題に、仏教精神に涵養された人材の育成を通して、今日の地球社会に貢献することを目標にしています。

●活動内容●

常住修行者、一般修行者の育成所として、ドイツ語圏ばかりでなく、英語による国際的な接触交流を推進し、日本の伝統に学びつつも、西

洋の歴史的・文化的条件および要望に適った独自の修行道場を確立。坐禅修行、仏教学習と仕事を日課とし、さらに安居期間を設け、集中的な修行および学習を定期的に行っています。

西洋の禅修行にあつては、坐禅修行とともに基礎学習が重視されるべきです。さらに教理学習と修行実践とは現代人の日常生活に深くかわり、役立つものでなければなりません。

そのために、一般参加者を対象とする様々な接心・ゼミナールの形式は、参加修行者の必要性に応じて計画し、その日課には、接心の種類により提唱、基本教理学習、堂頭との個人面談、仏法についてのグループディスカッション、戸外での歩行瞑想、そして体操などを組み込んでいます。

また禅・仏教・東洋精神を紹介し、理解を得るために、茶道、華道、書道、尺八等仏教に育まれた日本文化のゼミナールを設けたり、定期

的催しを企画・実行しています。

さらに比較宗教学、東洋思想、西洋思想、禅仏教等に詳しい各界の専門家を招き、定期的にシンポジウムを開催しています。

社団法人 ドイツ「恵光」日本文化センター

デュッセルドルフ市の一角、ニードカッセル地区に設立されました。このセンターは、仏教寺院、大小の日本庭園、お茶室つき日本家屋からなり、建物の半地下には展示室、講堂（釈迦堂）、三つのゼミナール室が造られ、また図書館と幼稚園も設置されています。



ドイツ「恵光」日本文化センター

デュッセルドルフはヨーロッパでもっとも深く日本と関わりのある町です。「恵光」日本文化センターの設置によって地元の文化に育ったドイツの人々は、日本固有の行事・慣習を理解する機会に恵まれることになり、同時に当地在住の多くの日本人も日本文化の親しみ深い行事に参加し、それを通してドイツ人との交流を深めることができるようになりました。東西の文化交流、相互理解の場となることがセンターの基本的な課題です。

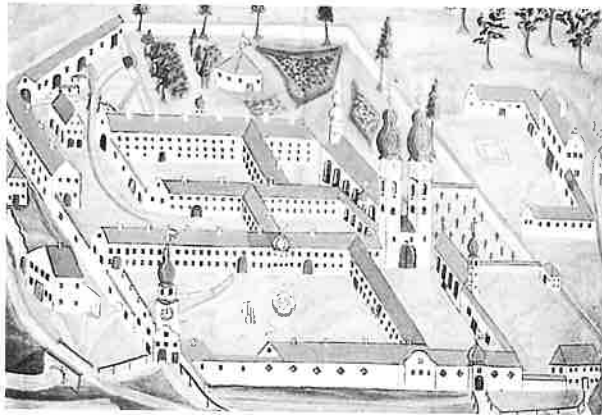
ドイツ「恵光」日本文化センターでは、次のような行事が催されます。
彼岸会、盂蘭盆会、座禅会、講演会、展示会、演奏会、映画会など。

ニーダーアルタイヒ修道院

ドイツ南東部 Bavaria 州の、オーストリア国境に接する市で、パッサウから四五キロの場所にある。創設は七三二年。

修道院はカソリックで、元ビール製造所であった場所にビザンティン式のチャペルが作られ、ニーダーアルタイヒの村人が参拝に使用している。現在この修道院は、東方正教会と西洋カソリック教会の相互理解を深めることに力を注いでいる。

修道院は小学校、高校としても使用され、会議室や研修所としても利用されている。学校では地域の伝統文化を伝え、キリスト教の精神を



1803年に描かれたニーダーアルタイヒ修道院

教えることを目指しつつ現代教育を施している。敷地内には散歩やハイキングコースがあり、近くには国立公園もある。

大遠忌参拝団に随参して

形山 俊彦

今年は大本山永平寺を開いた道元禪師の没後七百五十年にあ

たる。このため永平寺では、大遠忌に向けて国内外でさまざま
な記念行事を展開してきた。い
よいよ御正当を迎えて、春から
秋にかけて、道元禪師を偲び、
その鴻恩に報答する大遠忌の法

要が連日のように永平寺で奉修
されている。

期間中、全国の宗門寺院から
選ばれた僧侶が「焼香師」とし
て永平寺に拝登し、入れ替わり
法堂で報恩法要の導師をつとめ
る。住職である禪師（貫首）に
代わってのお勤めである。法要

は早朝から夜まで何座も営まれ、
山内大衆（指導者や修行僧）と
ともに、開山道元禪師がいます
がごとく、真前に茶菓湯を献じ、
香を薫じて御供養する。

善光寺の黒田武志住職も、そ
の焼香師の一人として永平寺か
ら拝請され、五月二十三日に九



十人にのぼる檀信徒の一人とともに永平寺へ参拝し、午時諷經導師の大役を果たした。

永平寺の大遠忌は開山道元禪師と二祖孤雲懷辨禪師のお二人について、五十年ごとに宗門を挙げて修行されている。私は昭和五十四年に奉修された二祖懷辨禪師七百回大遠忌を「中外日報」の駆け出し記者として取材したことを懐かしく思い出す。

門前に宿をとり、そこに臨時支局を構えて、二週間ほど詰めつきりで日々の大遠忌行事を追いかけ、取材した。連日、全国から焼香師が上山し、団体参拝が続々と拝登した。山内は随喜の僧俗であふれ、整然と諸行事・法要が営まれるさまは厳肅かつ壯観だった。

その頃はまだパソコンも普及していなかったから、一日が終わると宿に戻って記事を書き、それを列車便で京都本社へ送稿した。刷り上がった新聞がまとめて届くと、それをもって永平寺の山内各寮から門前の旅館や売店にまで配り歩いた。

この時の経験は私にとって、



まことに大きい。まさに大遠忌
 によって永平寺や曹洞宗との深
 い縁が結ばれたと言ってよい。
 道元禅師が日本曹洞第一道場と
 して開かれた永平寺の七百年を

越える伝統の重さ、ふところの
 大きさ、温かさというものを、
 この大遠忌取材を通して教えて
 いただいたと思っっている。

二祖懷辨禅師の大遠忌は「孝
 順心」がテーマだった。それは、
 日本達磨宗という大きな勢力を
 もつ教団の指導者であった懷辨
 禅師が、道元禅師の教えにふれ、
 門下を率いて道元禅師に帰依し、
 生涯を影の形に随うように捧げ
 尽くした姿を「孝順」の二字を
 もって表現し、その行跡を仰ぐ
 ものである。

今年の大遠忌のテーマは「慕
 古心（もこしん）」。ここには、
 道元禅師の古風を慕い、その心
 を現代に宣揚し、わが身に実践

しようという願いが込められて
 いる。

さて、私は善光寺・黒田住職
 の焼香師拜命に随喜する参拝団



に同行した。取材する側ではなく、大遠忌に随喜参拝する檀信徒の側から大遠忌に参加する機会を与えていただいた。このことは、はからずも私の二十年余に及ぶ記者生活を振り返り、自分が拠って立つものが何なのかをあらためて考える機会にもなった。

法堂に案内された一行は、雲柄から「道元禪師は礼拝を尊ばれた。礼拝は道徳ではありません。礼拝はお釈迦様から伝えられた仏法の中で最も大切な行持です。礼拝がなくなったら仏法もなくなってしまうとのお示しです」と威儀即仏法の道元禪の要諦を教わった。

伝統とは何だろう。七百五十年の法灯を今に伝える曹洞宗は、この大遠忌から何を学ぼうとしているのだろうか。永平寺法堂での法要に随喜し、参拝者の一人として真前に焼香礼拝しながら、私の胸裡をよぎったものは、道元禪師が永平寺に住したときの上堂の言葉である。曰く「たとい、衆多きも、しかも抱道の人なきときは、則ちこれを小叢林となす。たとい院小さきも、しかも抱道の人あらば、これを大叢林となす」と。

しかし、これはまだ記者としての第三者の目でしかない。お前はどうかなのか、と問われるのが才チである。いま私の心中に

響く言葉がある。道元禪師入宋の折、天童寺の老典座が若き禪師に向かって吐いた一言、「他はこれ吾にあらざ」——私の人生は誰に代わってもらうこともできない。自分の人生は自分で切り開け——私にはこんな叱咤の声が届いてる。

高祖道元禪師七百五十回大遠忌

黒田老師、午時諷経を奉修

焼香師 香語

高祖法燈方熾然

爾来七百五旬年

心香一弁堪瞻仰

只管禪風隔世縁

高祖こうその法燈ほうとう方まきに熾然しねんたり

爾来じらい 七百五旬年ななひゃくごじゅんねん

心香しんかう一瓣いっぺん瞻仰せんやうするに堪たえたり

只管しかんの禪風ぜんかう世縁せえんを隔へだつ





今年は曹洞宗高祖道元禪師様の七百五十年忌にあたります。昨年の五月から海外、また、国内各地の縁の地で大遠忌予修法要が行われてきました。そして、この三月からは道元禪師様が開山された福井県吉田郡永平寺町の大本山永平寺で大遠忌奉修が行われました。

既に『成寿』前号でご紹介したように、成寿山善光寺住職黒田武志老師は大遠忌奉修で栄えある焼香師を拝命し、五月二十三日、その大命を無事果たしました。





大役を終えた黒田老師



順々に合掌する随行団の皆さん



山代温泉のホテルでくつろぐ一行

当日は、午後十二時半、木村副監院の献湯諷
 経に続いて、黒田老師の午時諷経が行われまし
 た。黒田老師の朗々とした読経の音が永平寺本
 堂を包み込む静寂の中に厳かに響き渡ります。
 そして、その錚々たる響きの中に道元禪師の功

績が、今、改めて甦ろうとしています。
 この日、横浜からは道元禪師の遺徳を偲びな
 がら、黒田老師の晴れ姿をまぶたに焼き付けよ
 うと善光寺壇信徒の皆さん総勢百名が大遠忌法
 要に参列、五十年に一度という貴重な時間を過



清水寺では北法相宗清水寺貫主森清範猯下自ら随行団をお迎えくださいました



清水寺で。永平寺でのお参りも終わって旅の気分を満喫する随行団の皆さんと黒田老師

ございました。深い木立に囲まれた永平寺、全国からお参りに集う人々。七百五十回大遠忌という独特の雰囲気の中で新たな心のよりどころに出会うことができたのでしょうか。
 一行は山代温泉で一泊した後、バスで京都に向かい、太祖瑩山禅師様ゆかりの顕彰碑の建つ清水寺貫主猯下の法話をいただき、京都御所を見学した後、新幹線で帰途につきました。

超神仏習合寺院出現とその社会的背景

—フィリピン・マニラ市の大千寺の場合—

駒沢大学名誉教授 佐々木 宏幹

一 はじめに

一般に「神仏習合」とは日本古来の神道と外来の仏教とが混交・融合する過程において生じたさまざまな現象を言う。神仏習合は神仏混交とも呼ばれ、具体的には今日の日本においても見られるように、同じ家に仏壇と神棚とが祀られている現象や、初詣でや七五三、結婚式は神社で行ない、葬儀や追善は寺院で営むような慣行をも意味する。

こうした神仏習合は日本に特有の文化現象であり、神と仏の混在は日本人の宗教信仰や宗教意識を解く鍵であるとも見なされてきた。そしてこの現象には、プラス、マイナス両様の評価がなされてきた観がある。

いわく異なる系統の諸宗教に抵抗なく無自覚かつ自由に関わる人びとの宗教意識は、前近代的なそれであり、その種の宗教はレヴェルが高いとは言えないという見解であり、マイナスの評価である。

この類の見解は、キリスト教を含む一宗教が發達した高次の宗教であると見る宗教進化主義の影響を多かれ少なかれ受けた知識人によって示されることが多い。

これにたいして、他の諸宗教との習合はその民族や社会の寛容性や柔軟性を示す証左であり、そのような特色をもっていたからこそ日本はアジアで最も早く近代化を成しとげたのだなどと主張し、この国の文化や宗教のプラス性を誇示する向きも少なくない。

ことにイスラーム教徒のファンダメンタルな行動やイスラエルにおけるユダヤ人とパレスチナ人との血なまぐさい闘争が、国際社会の注目を浴びている昨今、神仏習合や神仏混交の文化がもつ人類的な可能性を論じる傾向が強まってきたようにも見える。

たしかに日本の民族宗教にも、日本に定着する過程において異国の神々を包摂するにいたつ

た仏教にも「目には目を、齒には齒を」のような復讐の思想は欠如していると言えよう。その宗教的性格の今後の可能性は大であろう。

しかし、だからと言ってわが国の神仏習合現象はわが国特有のものであると理解してはたしてよいのであろうか、否である。

他のアジア諸国にも類似の現象が数多く見られるからである。その一つの事例を紹介しよう。

二 大千寺の宗教的性格について

フィリピン共和国の首都マニラ市をほぼ南北に分断するように流れるパシグ川北岸地域は、中国大陸から来住した華人たちの多くが生活する華人社会である。

一九九〇年の統計によると、フィリピンに住する華人人口は約六十五万人であり、総人口六千六十八万人の約一%にあたる。その三分の二(約四十万人)がマニラ華人社会とマニラ首都

圏に住むという。

華人社会はビノンド、トンド、サンタ・クルス、サンニコラスなどの地区に分かれており、これら地区には仏教の寺院と道教の道観がキリスト教（カトリック）の教会やイスラームのモスクと共存している。

仏教寺院として広く知られているのは、トンド地区の信願寺、宿燕寺、大千寺、サンタ・クルス地区の円通寺、普陀寺である。

これら仏教寺院のなかでも、そのユニークな性格ゆえにひとときわ有名なのがトンドの大千寺である。

この寺院は大千寺（仏教）、広澤尊王廟（道教）、そしてエキュメニカル・チャーチ（キリスト教）の三つの名前をもっている。

中国人の宗教は儒仏道の三教であるとよく言われたが、ここでは仏道基の三教である。いや実際にはイスラームの神も祀ってあるから、仏



大千寺全景

道基回の四教であるということになる。

このユニークで奇妙な宗教施設の創始者は蘇超夷（一九二七年生）である。彼はみずからを“大千宏一法師”と名乗っている。

大千寺のユニークさは、その建物の形に表れている。それは円形のコンクリートづくりで二階部分は吹き抜けになっており、天井はゆるやかな円錐形をなし、中心に円形のガラス張り窓があるというものだ。

蘇によると廟の形は宇宙を表現するとともに、土^サ星^{タイン}を象徴するともいう。

正面玄関を入ると、ホール中心には八卦図形の大理石製大型噴水があり、高く噴き上げる何条もの水柱に七色の光線が反射するようになっている。

正面奥には半円形の壁面を背に、六十五体の神仏像が上中下三段に配列された六十五本の大理石製円柱上に安置され、各神仏像の脚下から



月曜日の集団儀礼

は冷水が噴きだし、円柱を伝って流れ下るようになっている。

神仏像の大きさは約二十五センチメートルほどで、精巧なつくりである。

このパンテオン（神仏の配列）は仏教系、道教系、キリスト教系およびイスラームから成っていることは一目瞭然だが、諸神仏像が漫然と並置されている訳ではない。

大千寺祭壇の諸神仏像

上位	中位	下位
徳年大歳	サント・ニーニョ	聖アンソニー
太陽星君	太乙救苦天尊	福德正神
南斗星君	註生娘娘	九天司令灶君
下元水官大帝	天与財神爺	文昌帝君
中元地官大帝	純陽仙師	青山靈王
与元天官大帝	海星菩薩	斗海母君
九天玄女	王母娘娘	清公活仏
アツラー	水提尊王	白蓮仏

イエス・キリスト	孚佑天君	伽藍尊王
阿弥陀仏	玉皇三太子	魁星爺
釈迦尊仏	広澤尊王	海宮菩薩
玉皇大帝	聖王娘	李羅車三太子
観世音菩薩	関聖夫子	風雨二神
靈宝天尊	包王公	玄境元帥
道德天尊	地藏王菩薩	殷靈官
元始天尊	聖母マリア	地下財神
燃燈古仏	清水祖師	開基思生
人間財神	達法師	鬼谷仙師
南極長生大帝	天与聖母	五谷仙師
北斗星君	盤古尊皇	準提仏母
大陰星君	聖マーチン	北極紫微帝君
ブラックナザレン		聖ジュード
二十二体	二十一体	二十二体

最上段の中心は仏教の中核釈迦尊仏と阿弥陀仏、その左側に道教の最高神玉皇大帝、右側にキリスト教の神の子イエス・キリストおよびイ



司式中の蘇法師

スラームの神アッラーが祀られているからである。

もともとイスラームは偶像を認めないので、アッラーは神像ではなく神座があるのみで、そこにIslamismと記してある。

半円形の祭壇の中央部には儀礼用の机があり、机上には香炉、燭台、油灯、鈴、鉦などが置いてあり、正面に向かって右側に鑿子、左側に木魚があつて儀礼のときに用いられる。吹き抜きの二階には右側にイエス・キリストの、左側に聖母マリアの等身大の像がそれぞれ一階ホールを見下ろすように立っている。

この両者は大千寺と信者の守護神であるときれる。

またホール一階のあちこちに大小さまざまな金色に輝く幼児姿の神像が立っているが、これらは土星霊 (Saturnian Spirit) と呼ばれ、蘇法師の守護神である。

中国福建省出身の両親の下にマニラ・トンドに生まれた蘇は、小学生の九歳のとき土星霊と出会い友となった。土星霊は永遠に幼児形をしており、蘇が物事を訊くと啓示を与えてくれるという。彼は霊能者の法師なのである。

彼のところには毎日健康と商売繁盛の祈願を依頼する人びと、先祖供養の依頼者、風水や運勢判断の希望者、病気に関する相談者などが訪れる。現在の信者二万人を自称する。

毎週日曜日午前、二度にわたり集団儀礼が行なわれ、大勢の信者がホールに参集する。

導師の蘇はカトリックの大司教のようなガウン姿で現れ、祭壇上の神仏に向かって信者とともに『宇宙経』を誦する。

鑿子と木魚のリズムに合わせて声高に唱えられる経文は「宇宙三光天降地 三光旋轉日月星
南無淨宿宇宙仏 月夜分明天作主 南極北極
各磁業 南無阿弥陀仏 自転公転地本身 好歹

分野為人丁 南無宝光自在仏 為非作惡神鬼知
行善救人無人欺 南無善住智慧仏 父生母養
共教育 育其子孫好生活 南無光明觀世仏：」
のように続く。

日曜礼拝が終ると蘇の説教が始まる。時事問題の解説から入り、他人への慈悲心を説き、孝養を強調し、平和の大切さを語る。

六十五体もの礼拝対象について、彼はこう説明する。「本来神や仏に名称はない。宗教にも名称はなかった。名称を作ったのは人間である。生まれたばかりの赤子に名前がないのと同じである。道教徒は四千七百年前に彼らの信仰を道教と呼び、二千五百年前に仏教徒はその宗教を仏教と名づけ、カトリックは二千年前に彼らの宗教をカトリシズムとした。この寺は宗教の原初・本来の立場に還って、あらゆる宗教の統合を図ろうとしている」と。

カルト的なこの習合宗教は今後どのような歩



治病儀礼中の蘇法師



宇宙經

宇宙三光天降地 三光旋轉日月星
南無淨宿佛宇宙

日夜分明天作主 南極北極各磁榮
南無阿彌陀佛

自轉公轉地本身 好夕分野爲人丁
南無寶光自在佛

『宇宙經』

みを進めるのだろうか。

三 大千寺出現の社会的背景考

大千寺のような寺院が出現し、多くの信者や依頼者を集めるにいたったのは、住職の蘇超夷の宗教的才覚のしからしむるところであるが、決してそれだけの理由からだけではあるまい。

主な理由・背景に現代フィリピンの社会—宗教的な状況があるはずと私は考える。

現在フィリピンの総人口の八五%がカトリック教徒であり、少数ではあるがイスラーム教徒もいる。総人口の1%を占めるにすぎない華人社会の人びとは、圧倒的なカトリック文化のただ中に生きている。彼らはカトリックと付き合いい、仲良くしなければ生存も覚つかない。現に若い世代にはカトリック信者が増えており、カトリックのフィリピン人と結婚するケースも少なくない。

私が調査したオンピン街の一華人家族の場合、祖父母と両親が仏教と道教を信奉しているのにたいして、子供四人兄弟のうち長男を除く三人がカトリックの洗礼を受けていた。注目すべきは、カトリック信者になった三人兄弟が受洗後も仏教と道教を信奉していると告白したことがある。

実際カトリック信者になっても寺廟への関わりをもつ華人が多いと言われる。

こうした華人社会の宗教の実情、つまり個人が仏・道・基に関わる現状は、大千寺の祭壇構成によく重なる。

また、フィリピン人社会には、キリスト教の聖者崇拜と結びついた信仰治療師たちがカトリック民衆の信仰を集めている。これら治療師たちは聖者の力を直接用いて治病行為を行なう点で、霊能者と言えよう。

土星霊の力を用いて病人に対する蘇法師は、

性格的にカトリックの信仰治療師たちに重なる。

蘇法師のユニークな大千寺は、まさにフィリピン社会のなかに生きる華人の社会—宗教的実情に合わせた宗教的役割をはたしていると見ることができよう。

世界の宗教には「アッラーの外に神なし」と主張するような厳格な一神教もある。しかし教義のレヴェルでは厳格な一神教も、民衆のレヴェルではカトリックのように、伝播した地域や社会の宗教的習俗・慣行とダイナミックに複合化していることが少なくない。

宗教は生きものである。理念を失っては元も子もないが、理念にこだわりすぎたのでは、人びとの多様なニーズに対応できまい。

多様な宗教的ニーズに応えるためには、観念的な教義とそれに基づく行持が必要であるし、葬祭も祈祷も、場合によっては治病儀礼も欠かせない。

そうした多様で柔軟でダイナミックで、したたかな宗教形態が習合宗教の特質ではあるまいか。そしてそのような宗教形態を生みだす宗教風土は、ひとり日本だけではなく、広く東・東南アジアに存在することに改めて注目する必要があると考える。大千寺はその顕著な一事例であると言えよう。

イスラム原理主義と テロ行為

ニューヨーク州立大学 伊藤 博

私はニューヨーク州の北に住んでおり、二〇〇一年九月十一日は自宅でその日教える航空法の授業の準備をしていました。

国際テロ団が民間機二機を乗っ取りニューヨーク市の世界貿易センターに激突させたニュースはテレビの現地からの特別放送

で聞きました。その直後、ワシントン国防省やペンシルバニア州の野原にも民間機で同様なテロ行為を行ったことも報道さ

れました。アメリカ政府はサウジアラビア人の過激原理主義者オサマ・ビン・ラディン一味と国際テロ組織アルカイダの仕業と断定して彼らを匿っていたアフガニスタンのタリバン過激原理主義政権を打倒しました。

日本人を含む二千八百人以上の市民が犠牲になったこの同時



多発事件の他にも、一九九七年のエジプトのルクソールで日本人十一名を含む六十二人が襲撃され死亡した事件や一九九九年のウズベキスタンで日本国際協力事業団の技師四名が拉致された事件もアルカイダ武装団一派の仕業とされています。

イスラム教と原理主義

キリスト教、ユダヤ教そしてイスラム教はどれも、唯一のしかも同じ神を信じます。その神は絶対的なもので、いかなるものをも超越しています。アラブ語で神をアラーとよび、神の教えに従うことをイスラムといい、

その教えに従う信者をモスリムと呼びます。世界の人口の五分の一に当たる十三億のイスラム教徒がいると推定され、キリスト教につぐ第二の宗教です。しかも欧米での脱宗教化と逆にイスラム教は世界各地で増えています。イスラム教徒はアラブ人に限りません。トルコ人、イラン人そしてアジアのインドネシアやパキスタンも大半がイスラム教徒です。

イスラム教はイエス・キリストも神の預言者であったことを認めています。キリストよりも後、西暦五七〇年頃今のサウジアラビアに生まれたモハメッドが最後の預言者と信じています。

天使を介してアラビア語でモハメッドに啓示した神の言葉を収録したコーランを唯一の神の教えとし、これに反する教条を認めません。コーランは倫理、道徳の聖典でありその法典は政治、経済、民事、刑事の全般にわたる生活を拘束する規範です。どの宗教にも多かれ少なかれ共通ですが、特にイスラム教徒は彼らの宗教の唯一性、卓越性を強く主張し、自己の正しさを押し出す独善、偏狭に陥りがちです。正義や公平をコーランに則り定義し、不正を行う者の来世での神の審判を信じます。他人の不正を見逃すイスラム教徒にも神の怒りが降りかかると信じ、神

を畏れます。その反面、絶対神に服従し謙虚になり、人間の弱さを自覚し自己の過ちを認めて神の慈悲を乞います。実際には過激原理主義者は極く少数で、大多数のイスラム教徒は心の安らぎや平穏な生活と平和な社会を願い毎日六信五行の修行に務めています。

経典の細部は大半モハメッドの生前、弟子たちに説いたものですが、全般にコーランは抽象的一般的に書かれています。千三百年の歴史を持つコーランの教義は硬く柔軟性に欠け、容易に新しい社会の慣習に対処できないことが多々あります。モハメッドの死後イスラム教が普及

し各地で新しい問題が起こるごとに、その時々々の事情に照らしてコーランと法典を解釈し注釈をつけて、実践されてきました。例えば金銭の貸し借りで利子を取ることは禁じられていますが、その後利子は許されるとコーランの解釈が変わり、二十世紀後半には、無利子の金融機関としてイスラム銀行が現れました。

イスラム教には原則として、カトリック教団のようなコーランの教義を画一的に解釈施行する組織や集団はありません。コーランやイスラム法典に精通したイスラム学者とか聖職者がいますが、宗教学の資格があるかどうかを決めるイスラム聖職者た

ちの組織や集団もありません。

都会ではイスラム学者たちがコーランを解釈したり、論争をしながら信者の悩み事の相談役になります。イスラム学者のいない地方や田舎では、一般信者の誰かが同じような役目を果たしています。一般大衆はコーランの教えを勝手に解釈することは許されないので、自分の気に入ったイスラム学者の講話を聞きに集まりその人の解釈に従います。逆に、聖職者はそのようにして信者を増やし知名度を高めます。それでも、オスマン帝国が栄えた時代には皇帝直属の長老の聖職者層が行った聖典と法典の解釈は、イスラム帝国全域に多



大な影響力を及ぼしました。しかし第一次大戦後、帝国が崩壊し幾つもの国家に分裂してからは、コーランの解釈やイスラム社会の内容も多種多様になり、どれが一義的に拘束力のある解釈か解らなくなっています。

イスラム教の発祥したサウジアラビアは最も厳格なイスラム国家です。アラビア半島において、十八世紀半ばイスラム教のワッハブ派は、教祖モハメツドの厳しい戒律を模範としたイスラム社会の再現を目指しました。アラビア人は今でも部族社会なので、まとめるのが難しい人種ですが、サウド家一族はこのワッハブ派教団と連帯し、

アラビア半島の統一拡大に成功しました。サウジアラビア王国は、コーランを憲法とし、イスラム法典を政治や社会の法規とし、ワッハーブ派が政経、文化社会のあらゆる分野でイスラム經典の解釈を通じて強大な影響力を及ぼしています。

しかし、コーランの解釈をめぐって水面下で分裂しています。一九九六年サウジアラビア駐在の米軍住宅が爆発し、十九人が死亡しました。その直後サウジ王室のワッハーブ派神学者たちがこのテロ行為を反イスラム的侵害であると厳しく非難しました。しかし一九九八年にオサマ・ビン・ラディンが中心となり

「ユダヤ人と十字軍に対する聖戦のためと世界イスラム戦線」を結成し王室に挑戦しました。

ビン・ラディンの逃亡先はイスラム教多数派であるスンニ派の国々で、この派には教皇も聖職者集団もおらず、聖戦を宣言しても一般大衆が従うとは限りません。それで、ビン・ラディンはアフガニスタンのタリバン政権の精神指導者ムハンマド・オマル師を使って自らの經典の判断をもって過激原理主義を合法化しイスラム社会を納得させようとした。

原理主義とテロ行為

イスラム原理主義者は独自の主義主張を無謬のものとし、他の宗教との対話を受け容れようとせず、他宗教の信者との共存を認めません。原理主義は宗教に限らず、民族や国家主義にもみられます。さらに、過激な原理主義者になると、他宗教の信者に武力も含めたあらゆる手段を使って独自の主義主張を受け容れさせ、政府に対し暴力や脅威で特定の行動を強要します。東西冷戦中にサウジアラビアがイスラム運動を支持する反面、エジプトのナセル政権がイスラ

ム運動に過酷な弾圧を加えイスラム過激分子を急進化させました。古来アフガニスタンには独自のコーランの解釈があつて部族紛争程度ですんでいましたが、ビン ラディンのようなよそ者の過激原理主義者が入りイスラムを極端に政治化したと言えましょう。

コーランは神から託され人間の生命をむやみに傷つけることを自殺も含めて禁じています。しかし、イスラム国家が社会の秩序維持や正義のために犯罪者を殺傷することは許されています。更に、コーランは教徒に内面的精神的な努力により、より敬虔な信者になることを強いて

いますが、イスラム教の敵と戦う聖戦も許していると解釈されています。聖戦にはイスラム領地のキリスト教やユダヤ教の異教徒に対する防衛のためのものと異教徒の領域に対する攻撃的なものがあります。

聖戦はイスラム学者や長老なら誰でも宣言できます。もっとも、イスラム以前のアラブ部族社会の習慣に始まり、通常は伝統的な合議や諮問を経て決められます。最近では、一九七九年ソ連軍の占領に対してアフガニスタン防衛の聖戦を宣言しましたし、オスマン皇国の時代でもイスラム学者の解釈と裁可を仰いで第一次世界大戦に参加しま

した。さらに、九百年ほど前、エルサレムの聖地に侵略してきたキリスト教十字軍との聖戦は周知の通りです。そして再び、現在イスラム教徒、とりわけ過激原理主義者の間でイスラム社会がユダヤ教徒とアメリカを先頭とする西側キリスト教徒の侵略を受けていると感じています。

ビン ラディンは同時多発事件への直接の関与をはっきりとは認めていませんが、テロ行為を容認しています。しかも、コーランは兵役に服していない一般市民を殺傷することをかたく禁じていますが、ビン ラディンは一般市民も間接的にイスラム活動に参加していると做して

犠牲になっても仕方がないと
いい切っています。エジプトの名
門アズハル イスラム教大学の
ムハマド サイエド タンタウイ
総長もイスラエル軍のパレスチ
ニア人殺害やパレスチニア人の
土地の接収、聖地の占領をテロ
行為と看なしますが、イスラム
の敵であるイスラエルに対して
自らを犠牲にすることは聖戦で



あると言います。と同時に、こ
の総長はビン ラディンは独り
善がりです。イスラム教徒の代弁者
ではないと断っています。

アメリカの同時多発事件で自
爆した十九人のテロリストのう
ち十五名もがイエメンとの国境
近く出身のサウジアラビア人で
国内の開発格差と現政権に批判
的な不満分子でした。ビン ラ
ディンの父親もイエメンに生ま
れ、サウジアラビアで土建業の
ゼネコンとして大富豪となりま
した。ビン ラディンはその遺
産をテロ活動につぎ込んでい
ると言われています。

ビン ラディンを始め過激原
理主義者は中近東のイスラム諸

国での腐敗した閉鎖的な王政に
不満を抱き、国家の枠組みをイ
スラム化し世界中にイスラム社
会を広める意図もあると言われ
ています。又、アラブ諸国は六
〇年代に社会主義的な国造りに
失敗し、石油ブームの七〇年代
の市場経済でも開発発展できま
せんでした。その結果、イスラ
ム原理主義者は石油の資産の不
平等な富の分配に大変不満でし
た。一方では、テロ行為で政府
に対し改革を強要しますが、他
方、理工及び医学系の若い人達
を巻き込んで、病院や学校の経
営、災害、貧困救済など社会福
祉事業に参加し、一般大衆の間
に影響力を伸ばしました。

アメリカへの敵視

過激原理主義者はアメリカを新たな帝国主義、植民地主義と決め付けます。中東の原油確保のためアメリカはアラブの資本

と市場を独占し、イスラム諸国の腐敗政権を支え、伝統的な文化や価値観を崩してきたと非難してきました。マクドナルドに象徴されるアメリカの消費文化が伝統的な消費生活を壊し、自給できるのにわざわざ輸入品を買って、新しい生活様式に変えていかねばならない近代化にも矛盾と圧力を感じています。彼らは国際通貨基金や世界銀行が

欧米の市場原理主義をあまりに単純にバザーや行商のような商業活動しか持たない中近東の発展途上国に当てはめて緊縮財政を強いる結果、貧困層が増えその貧困がテロの温床になっていると非難します。

原理主義者はさらに、アメリカのイスラエル支持をイスラム教徒への敵対行為と決め付けます。ヨルダン川西岸地区と聖地「エルサレム旧市街」のある東エルサレムの占領と同胞パレスチナ人難民問題を全てユダヤ人のイスラム教徒に対する弾圧、迫害とみなし、それを支援しているアメリカをも敵視しています。一九九〇年に勃発した湾岸

戦争後も数千人のアメリカ軍がサウジアラビアに駐留していますが、ビン ラディンはイラクへの爆撃に猛反対したり、米軍のイスラム教の聖地サウジアラビアからの撤退を強く要求しました。これに対して湾岸のイスラム諸国はテロ規制を強化し、ビン ラディンを始め一部の過激派原理主義者たちを海外に追放したぐらいで根本的な処置をとりませんでした。過激派の一部は欧米を拠点として世界中でテロ活動を続けています。

サウジアラビアはもとよりエジプトの様なアラブ諸国では穏健なイスラム学者は政府側からも原理主義者からも抑圧され、

極端な解釈をする過激派に立ち向かえない立場にあります。カ
イロのアズハル教会の一長老が
穏健派の知識人を背教者と断定
したことがあります。すると誰

でも背教者を殺してよいという
風潮があり、この判断を否定す
る別の長老の宣言が出ないまま
この人物は殺害されてしまいま
した。同様にイランのイスラム
教指導者に批判的な「悪魔の歌」
という小説を書いた小説家ソロ
モン ラシテを殺害せよとの宣
告も世界中のスニ派信者に殺
人を犯しても良いという自由手
形を渡したようなものでした。
この様にイスラム教知識人が身
の危険を感じ、テロ行為を非難

できないでいると、穏健な一般
の教徒でもテロ行為が宗教の名
の下に許されると誤解し、非難
するのを自己抑制してしまふ畏
れがあります。

仏教の対応

テロ行為を宗教とは関係のな
い、宗教に名をかけた犯罪だと
片付ける人がいます。しかし、
イスラム教を始め他の宗教にも
暴力を伴う行為を容認するよう
な教義が内在します。原理主義
者は暴力行為を正当化するため
に、そのような暴力行為も教義
の本来の意味に入っており宗教
上許されるのだと都合良く解釈

適用しがちです。一九九五年の
松本サリン事件や坂本弁護士一
家殺害事件、そして東京の地下
鉄サリン事件を引き起こしたオ
ウム真理教がその良い例です。

先ずオウム真理教を宗教と呼ぶ
かどうかの問題ですが、当初政
府が宗教法人を認定したという
意味では宗教でした。しかし、
麻原彰晃の教義はチベット仏教、
ヒンズー教、キリスト教、ゾロ
アスター教などを寄せ集めたも
のです。しかも後、危機感を煽
るためもともと終末論的観点を
もたない仏教を離れキリスト教
の聖書に材料を探しつつ、自ら
をキリストに模していきました。
この様な新興宗教が伝統的な宗

教と同意義の宗教かは大いに疑問で歴史が決めるでしょう。要するに麻原彰晃がテロ行為を正当化するために用いた論法が問題です。彼はオウム教団と日本社会を対立させ、さらに現世の無常を説いた後、第三次世界大戦による破滅を予言しました。

そして、切迫する世界最後の日に行われる善と悪との対決を設定し、オウム教団と釈迦を守り信者を生き延びさせ、靈的に開放することを叫びました。一般市民をポア（殺人）することは真の愛と真の哀れみの現れであり、信者を救済する手段であると正当化しました。東京の地下鉄サリン事件の林郁夫は逮捕後、

手記に「人を傷つけたり、殺すことはどんな目的にせよ決して許されるべきでなく、この宇宙の営みの中に生かされている存在には本来与えられていない手段であると思う」と書いています。しかし、彼が十二人もの人を殺害し五千人以上もの人を傷害した事実はオウム真理教を實現する目的のためには人間の殺傷も許されると解釈していたことを物語っています。つまり、ある教義に複数の意味が内在する場合自分に都合の良い意味を解釈適用し、暴力を伴う無差別テロ行為を正当化しがちです。

イスラム教と仏教には根本的な思想の相違があります。イン

ド仏教の根源をなすヒンズー教の思想には天地を創造したという絶対唯一神はおらず、仏教にもその様な発想はないので、仏教はイスラム信者には無神論と映るでしょう。また、唯一絶対神を信ずるイスラム教徒には神仏混合が異様に思えるでしょう。逆に、たとえ偶像崇拜を禁じるイスラム教であっても仏像を拝む仏教徒の姿はイスラム教徒には神を汚す行為と映るのでしょうか。アフガニスタンのバミヤンの岩窟にあった二、三世紀に彫った大仏像を爆破したタリバンの行為は世界の文化遺産の破壊につながり、仏教徒をはじめ一般人は理解に苦しむでしょう。

う。最後に、仏陀は靈魂の存在を明言しなかつたので、来世の到来と死後の生命を信じて疑わないイスラム教徒に仏教徒は戸惑う場合もあるでしょう。

このような教義上の相違にも係わらず、日本人は中近東において同一の神を信ずるイスラム教、ユダヤ教、キリスト教という異文明社会の衝突を避け対話を促進する仲介者として期待されています。その観点から、二〇〇〇年に外務省も二十一世紀の日本とイスラム社会の関係強化を提言しました。テロ行為はイスラム教の独占ではなくオウム真理教を生んだ日本の土壌にも起こることを自覚した上で、

私達は他の宗教や文化を理解し原理主義者との対話の場を模索することでしょう。

この原稿を仕上げている二〇〇二年十月中旬、インドネシアのバリ島でイスラム過激分子によるテロ行為で二百名ちかくの命が奪われたニュースを聞いています。



黒田住職産経新聞 「この人に聞く」に登場

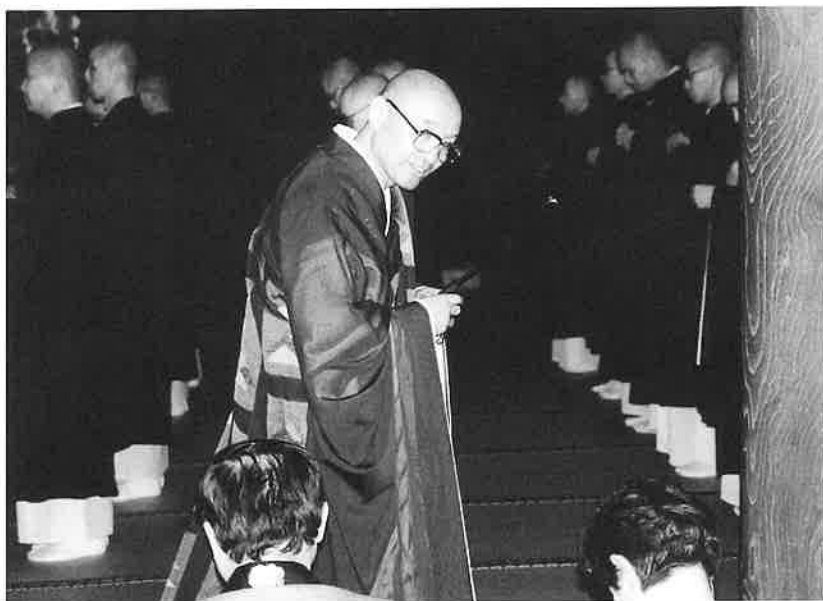
平成14年5月20日付の産経新聞にて、黒田住職へのインタビュー記事が掲載されました。ここに転載してご紹介します。

横浜市港南区善光寺、黒田武志住職（六四）は「留学僧育英会」の理事長を務める。今年で十八周年を迎えた同会は、宗派を超えた留学僧を派遣したり受け入れたりしており、その数はアジアを中心に世界二十一方国・地域の百六人にのぼる。この功績から曹洞宗特別奨励賞も受賞した。自らもタイや米国で修行した黒田住職に、その経験や日本人の国際性について聞いた。

人間一人じゃ生きられない

——なぜ育英会を？

「大学院を修了後、福井県の大本山永平寺に修行に行ったが、折り合わず半年で飛び出しました。帰郷する旅費もなく、全国を托鉢（たくはつ）して周り、日本中の人の親切が身に染みた。その時の『人間は一人じゃ生きられない』という



思いが原点です。開教師として渡った米国でも、金がなく助けてもらった。その恩返しのために、も世界に通ずる人をつくらなければという気持ちなんです」

——育英会の制度は

「仏教の学者と僧を日本から派遣し、海外からも受け入れている。留学僧を預かるだけでなく、まとめて奨学金を渡して協力してもらっている学校や寺院に派遣しています。学校を作るとなると大がかりでも、留学制度なら身近に世界的な教育を実践できますから」

——実際に運用してみてもどうですか

「タイや韓国に帰っていく留学僧が『母国に帰ったら、先生がしているように困っている学生を助けてあげたい』と言ってくれるのが一番うれしい。この輪をさらに広げていきたい。半面、やはり経済的な問題では苦労しました。最初は駒沢大学関係者など縁で出会った人々に相

談をしながら、檀家だんかの方々とも協力して今日まで続けてこられた」

「衆生救済」世界に広げる

——僧侶としては異色ですね

「当初は一年もてばいいなどと冷たく扱われましたが、今は理解してもらえた。最近の僧侶は形に捉われすぎて役人のようになってしまう。資格を取ってしまえば生活に困らないという体質。宗教家は衆生救済という原点に戻らなくちゃいけない」

——内外の留学僧の違いはどうか

「海外からの留学僧は国から選ばれてきたというところもあり姿勢が真剣。一方、日本人は自分から幸せをつかもうという力に欠けている。夢が組織や風習に負けてしまうから個性が生かせない。島国的な根性で世界の動きにも対応できない。心をおおらかに互いの良い所を見るべ

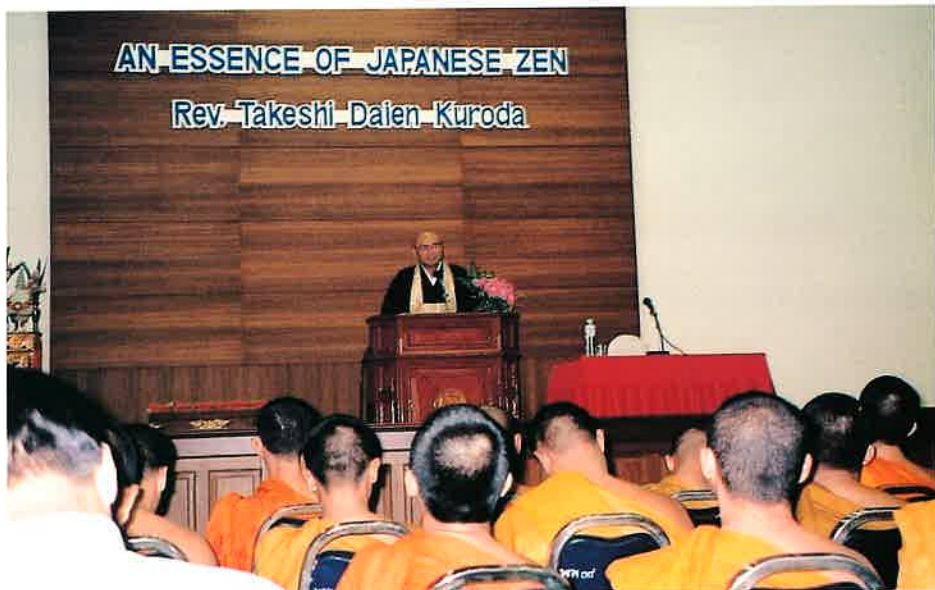
きです」

——今後の夢は？

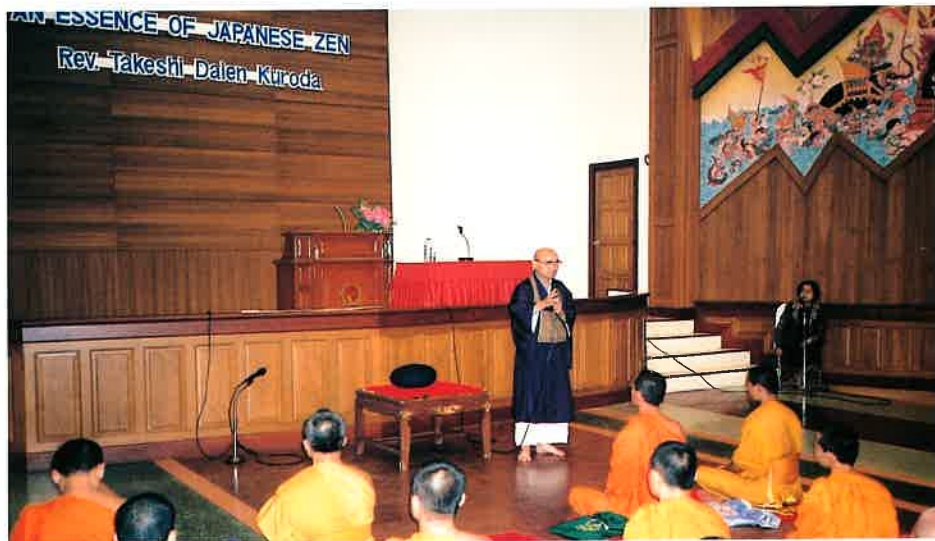
「世界に通用する人を育て続けることに尽きます。横浜で一番でなく、世界という目標を持って初めて大きなことができる。口だけではなく実際に行動に移すことが大事。人々の幸せのために働けば、結果はおのずとついてくるものです」

澄み切った瞳の前に

タイ・バンコクにて禅を語る黒田武志住職

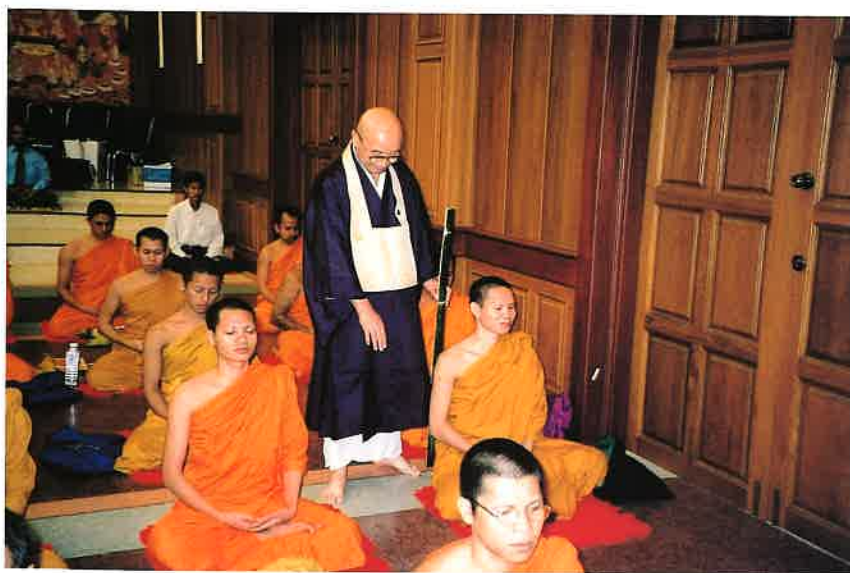


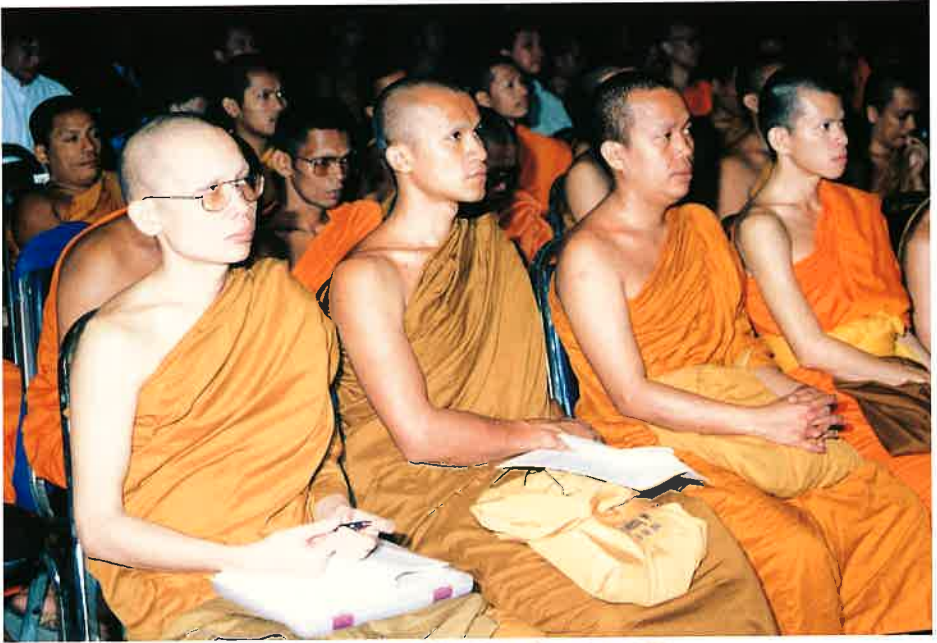
講演中の黒田方丈



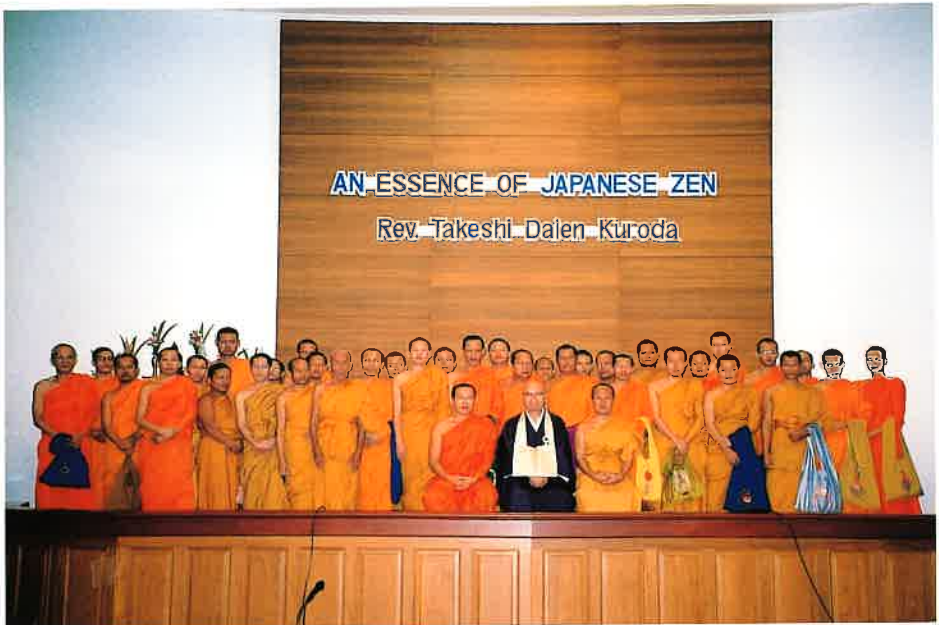


警策をもち坐禅指導する黒田方丈





講演を聞く真剣なまなざしのタイ僧



黒田方丈を囲み記念撮影



ノーラニット・セータブット世界仏教大学学長(左)と松下日本僧とともに



三歸依を唱えるタイ僧

タイ・世界仏教徒連盟でスピーチ

平成十四年十月十三日、タイ・バンコクの世界仏教徒連盟（WFB）にて、黒田武志住職が禅についてスピーチを行いました。世界仏教徒青年連盟（WFBY）の招請に応じたもので、タイ国内の学生、教師、僧侶が集まり聴講しました。ここにその講演を採録いたします。

坐禅の姿がそのまま仏

善光寺住職 黒田 武志

ただいまご紹介に預かりました黒田武志と申します。

日本の首都東京に近い、横浜の善光寺という寺の住職をして

おります。本日は、世界仏教徒連盟本部のお招きで皆さんと出会う機会をいただき、感謝しております。

日本には「一期一会」という言葉がございます。いづどんなときも一生に一度。今この出会いは再びない、かけがえのない機会。この出会いも偶然ではなく、み仏のお導きであると教えております。こうして、この会場にいる皆さんのお顔を拝見しておりますと、この機会を無駄



には出来ません。大事に過ごし
て参りたいと思っています。お
ひとり、おひとりの澄み切った
お顔の輝きに驚かされますと
もに、心の温かさが伝わってま
いります。さすが、九五パーセ
ントが敬虔な仏教徒という崇高

なお国柄、その国に生を受け、
尊い「み仏」の懐に抱かれ、篤
い信仰の中で成長してきた方々
なんだと、感銘を深くしており
ます。

私の国には、二十歳という大
きな人生の節目を迎えた若い人

たちに、厳肅なる成人の儀式が
あります。成人として認知され、
選挙権を持ちますが、同時に大
人としての権利と、人としての
責任と義務というものが生じて
参ります。子供ではないという
認識と自覚を促す儀式なのです。

昨今これに出席した新成人の
一部が、携帯電話でおしゃべり
をしたり、メールのやり取りを
したり、挙句の果てに酔っ払っ
て、大事な式典をメチャクチャ
にしてしまう心ない若者もいた
ようです。二十歳で剃髪して得
度出家しようなんて、そんな若
者は皆無に等しい。タイ国の上
座部仏教の二二七の戒律の話な
ど聞いたら、目をまん丸にして、

「信じられない！」ということでしょう。

でもね、私は信じているんですよ。釈尊の真の教えが、いつか伝わる日が来るであろうことを、そしていずれ、そうした一部の日本の若者にも、皆さんのような、内なる美しい魂に目覚める目を持つ日がくるんだと。

私も、皆さんと同じくらいに若かった頃、とても未熟でした。自分がいかにして生きるべきか、生き方が分からない。その答えを模索しても見つからず、もがき苦しんだ日々がありました。皆さんの中にも、私と同じように悩みを抱えている方が多分いらっしゃると思います。若い



時分は大いに悩み苦しんで結構だ。ただ大事なことは自分が成長するためには、いつたい自分自身にどんな力がつかねばならないのか、どんな人格的变化が生じなければならぬのか、よく考えてみることです。

私も悩み多き青年雲水時代を味わいました。日本では、禅の修行僧のことを、行く雲の如く流れる水の如くと書いて雲水というのですが、私も行により救われました。皆さんも大丈夫です。しっかりとみ仏さまにしがみついたら、必ずみ仏は、みなさんをすばらしい未来へと導いてくれますから、深く仏道を信じて安心しておまかせして

いればいいんですね。

そうですね、もう、四十年も前のことになりましたよ。自分が見仏に生かされている存在だと気づくまで、随分時間と労力と勉強のときを費やしてしまいました。多くのこだわりやとらわれの心に振り回され、今思えば、全ては懐かしく決して無駄ではなかった。

当時日本では、托鉢して修行するというお坊さんはほとんどいなかった。もともとタイの仏教と日本の仏教は原点（お釈迦さまの教え）は同じでも、行と布教と理解の有り方に基本的な違いがあります。これを一言で語ることは出来ません。

お釈迦様の種は、八万四千。

その種は宇宙空間を舞い、夫々の国に降りてきた。そして国々の風土や固有の文化、国の特性、社会変動によって、多様な信仰に展開。様々な仏教という花を咲かせてきた。日本の仏教もその中の一つです。

私は日本全国を托鉢行脚いたしました。日本の交通標語に「狭い日本そんなに急いで何処に行く」とありますが、狭いということも歩くと一万キロになる。ここ、タイの国では、托鉢するお坊さまの尊い姿をよくお見かけすることが出来ますね。タンブンをすると、すばらしい習慣が今も息づいています。お布

施をした方が、「タンブンさせていただきました。幸せになることができます。ありがとうございます。まず」とお礼をいう。

布施をして、感謝すべきは、与えた側で、受け取った側ではない。これは「もらっていただいてありがとう」という、日本の国とはまったく異なる習慣で、私はこのタンブンのお話を聞くたびに、「感謝の気持ちにいつも満ちている」タイの方々の心の清らかさを感じずにはいられません。

申しましたように日本では、そうした托鉢修行の習慣は、ほとんどありませんでしたから、私の托鉢行脚修行は、口ではい

い表せないほどの苦痛を伴ったものとなりました。飢えと寒さと恥辱感。途中「いったい私は、何をしているんだろう」と自暴自棄になりそうになったときもありました。粗食を食い、水を飲み、ひじを曲げて枕とするような苦行。日本はタイ国のように温暖ではありません。灼熱があつたり、風雪が厳しかったり、四季折々あらゆる変化がやってまいります。ただ歩くだけではない。家々が受け入れてくれない、迷惑そうに追い出されることも少なくない。そんな中、感謝する心も言葉さえ失ってしまっていた。しかし、どん底の中で毎日毎日托鉢三昧の生活を続け

ておりますと、ある日ふと、不平不満ばかりいつている自己の姿に気づく瞬間がきたのです。「私は、僧侶じゃないか。自分のことなんか気にしている場合じゃない。私の今やるべきことは、ただひたすらに人の幸せを願ってお経をあげることじゃないか」と気づく。そんな自分にサーッと霧が晴れるがごとく答えが見つかると、今度は、み仏に生かされている自分を見て大いなる感謝の気持ちがあふれ出てきたのです。

今に訪れると思います。とくに、こんなに信仰心の厚い、すばらしい環境に恵まれた国で暮らしているのですから、きつとそれは、早い時期に訪れることでしょう。

修行というものは、人のためにするのではなく、「自分のためにする」という自覚。大事なことです。させられているのではないということです。タイの環境では私の申し上げていることは理解しにくいかも知りませぬ。これでも日本は仏教国なのです。

私も若き頃、いろいろと周り道をいたしましたけれども、何か托鉢行で人生観が変わりまし

た。あらためて私の学んできた
仏教の宗派であります日本曹洞
宗の大本山、總持寺での本格的
修行生活に入りました。以前に
も修行していたのですが、その
頃は迷いが多すぎて身につかな
かったのですね。

さて、ひとつの宗派でありま
す曹洞宗は、道元禪師を開祖と
しておりますが、その説かれた
道につきましては、また後に詳
しく述べたいと思います。曹洞
宗總持寺で修行の後、さらに自
分を高めたいと思ひまして、仏
教の原点でもある上座部仏教が
今なお脈々と息づいている、こ
こタイ国のワット・パクナムで
修行させていただき、得度をさ

せていただきました。きっと、
今も、あの当時のままの修行生
活を皆さん続けておられるので
しょうが。

手のひらの線がやっと見える
くらいの薄暗い頃から托鉢をし、
早朝と正午の食事以外は、瞑想
と仏教学、パーリ語学などの勉
強。原始仏教以来の伝統を護り
通し、二二七という厳しい戒律
の実践を中心として広く人々の
精神を高め導いてくれる。上座
部仏教修行の体験は、私にとって
この上なく尊い精神的財産となっ
ています。

体験済みの方が多くかと思わ
れますが、皆さんは、やろうと
思えば、いつでもあの清浄で崇

高な体験を得ることができると
ですね。タイ仏教の伝統におい
ては、男性は若くして一度出家
することで、一人前の成人とし
て認められるとうかがっております。
日本の仏教にはこんな習
慣も、伝統も有りません。上座
部仏教と大乘仏教の大きい違
うところでは、お釈迦さまの「真
理」はひとつでも、ところ変わ
ればその表面はずいぶん違って
まいります。もちろんどちらが
良いとか、悪いとかという次元
の問題ではありません。

伺いますと、タイ国屈指の名
門チュラロンコン大学の医学部
を中心とした学生さんたちが、
毎年、ワット・パー・スナン寺



で短期出家修行プログラムに参加し、限りなく人間性を磨いていらつしやるという。これなど、日本でもたいへん驚きとともに話題になっております。高いレベルの勉学に励みながら一様にこの修行プログラムに参加しているという。素晴らしいことです。はじめての厳しい修行で最初は戸惑う方も多かったとききます。

一方日本の若者でしたら、多分「やっ



てられないよ」とすぐに弱音を吐いてしまうかもしれません。しかしながら、タイの学生さんたちは、お寺の生活に慣れてくるにしたがって、それぞれの持ち味を発揮しはじめ、瞑想修行へも真剣に取り組み、毎日時間を見つけては、アチャーンと法(ダルマ)に関する問答をするなど、仏陀の尊い教えに真摯に向き合う日々を過ごしている。私は、この話を聞いたときには、本当に、命がけで患者さんの命と、そして心と向き合うことができる、真の「医師」が誕生することは間違いない、と確信いたしました。

日本でもぜひこのようなプロ

グラムが医学部の必修として取り入れられれば、医療ミスを隠したり、お金を優先するような不心得な医師は存在しなくなるのと思うのです。

日々、修行の道を選び歩むタイのお坊さまたち。最上の尊敬の念をいだかれ、人々に手を合わされるのがあたりまえの崇高な存在なのですね。仏陀の教えを忠実に聴き、心のまなこを開こうと修行するタイのお坊さまたちは、社会では貴賤を問わず人々の心の師であり、よき相談相手。恵まれない人々に積極的

に手を差し伸べ、み仏とともに歩む本来の「仏弟子」のお姿そのままを表していらっしゃる。

日本においては「苦しいときの神仏頼み」といった言葉があります。多くの人びとにとって宗教は、その人の人生において問題がなければ無縁の存在であるといったような考え方がどこかに潜んでいるように思えます。私は宗教というものは、多くの人びとに永遠なるものへの力と信仰を与え魂の救いとなってきたことをよく承知しております。宗教を信じるものも信じないものも「人間愛」の精神だけは失わせないために、救いの場と影響を与えていきたいと信念しているのです。

私も、一人の日本の僧侶として、地球的規模で見れば、同じ

原点を持つ仏教を学ぶ者の一人として、その仏弟子の末端にでも入れさせていただけるのではないかと、それをたいへん光榮に、そしてありがたく思います。

気の遠くなるほどの年月のうちに、いろいろな解釈のしかたによってあらゆる宗派が枝分かれしたとしても、お釈迦さまの教えを正しく伝え実践し、生命の尊さの自覚、世界平和の実現、自然環境との調和、後世の眞の光明となるように日々精進していききたいという気持ちは、仏教を学ぶ者はみな同じでございます。

私は、常々、「宗祖を通して、釈尊に還れ」を私の仏教生活の

原点として心に刻んでまいりました。私の寺、横浜善光寺の宗旨は曹洞宗（あるいは禅宗）と申しまして、宗祖は道元禪師さまだということは先程お話ししました。曹洞宗は今から七

百六十年以上前に開かれ、今年二〇〇二年はちょうど道元禪師さま七百五十回大遠忌にあたり、日本全国一万五千か寺の中から、また海外からも、その法系にあたられる高僧のみなさまが一同に集まります。そして、この道元禪師さまの四代目にあたられる瑩山禪師様というお方が、曹洞宗を民衆にもわかりやすく説きお広めになりました。そこで、このお二人のことを私たちが

は、宗祖として尊び、仏教を学ぶものに「お釈迦さま」を正しく教え導いてくださるから、宗門の父母にもあたられるお方として、両祖大師として申し上げております。

道元禪師さまがどのようなお方で、どのように仏の道を説かれたかを、みなさまにお話ししたいと思います。

道元禪師は、「仏道が正しく伝えられた国では、みな、仏法僧を敬っている」とおっしゃっています。ここタイ国はまさに、仏と自分は一体、それを究極の心よりどころとして三宝に帰依している、まさに、禪師のおっしゃるところの「国民一人一人

の中に釈尊の命が息づいている」国ですね。

「仏道をならふとは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己を忘るるなり。自己を忘るるといふは、万法に証せらるるなり。万法に証せらるるというは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむることなり」これは、道元禪師の表した『正法眼蔵』という代表書物の一説です。たいへん難解な仏教書だといわれておりますが、人間の根源的な在り方、生き方をさまざまな言葉で伝えてくださっているものです。

この一説の意味は、「仏の道を学ぶということとは、実は自分自

身を学ぶということだ。自分自身を学ぶということは、身についた知識や経験、思慮分別を捨て去ること。我執を捨て去り、生まれたままの純粹な、清浄な自分を取り戻すことである。自分というところわれを離れ、この瞬間瞬間の「今」の自然の流れに身をまかせ、大自然そして地球、そして宇宙と自分が一体となれば、何のわずらいもない。それが真理の中にいるということである。その真理の中で生きていけば、身も心も、一切の束縛から離脱して自由になり、自分ばかりか接する人々をも自然のままに清浄にできるものである」と教えています。

「自分を忘れること」今の若者にとっては大変難しいことかもしれません。現代に生きている人々は、さまざまな欲望があり、何か、目的を持って「自分のため」に生きようとしてしまっています。そんな生き方の延長線上にあるものは、憎悪・競争心・対立・紛争・貧窮・飢餓・自然破壊・地球破壊、その延長線上には人類の滅亡かもしれません。自分が、自分が、といていくようで、実は「世間のものさし、世間の見方」の奴隷になってしまっている。

「自己をならふ」ということは、自分自身が、「仏さまに生かされている存在だ」と気づくこ

とです。人間が宇宙の森羅万象を査定できるものではないのです。人間は、万法つまり、宇宙の真理を体得し、「宇宙の真理の一部として吸収されてしまうこと」が大切なのです。それが、仏道をならうということなのです。

道元禪師は、この、難解な「自己自身の発見」のしかたとして、坐禅をすること、唯ひたすら坐禅をすることを説いておられます。「坐」とは外なる環境に惑わされぬこと。「禅」とはうちなる妄想、雑念、襲い掛かる睡魔の欲望に惑わされず、宇宙と一体化することです。

道元禪師のお言葉の「只管打しかんた

坐ざ」とは、坐禅に何の意義も条件も求めずに、ただひたすらに無所得・無所悟の立場から坐禅を実践することです。無所得とは、得ることのないこと。得ようとする心のないこと。無所悟とは、悟りを求める気持ちもないこと。こうした、澄み切った透明な心を禅では「平常心」と申します。

たとえば、毎朝洗顔をする。これは、汚れているから洗う、汚れていないから洗わないという常識的な清潔感の枠を越えた、無所得の実践です。タイの方々も挨拶のときに手を合わせます。そこには、人に対しての敬い的心が、無意識のうちに自然に出

ていらっしやる。これこそ「平常心」なのです。日本では残念ながら、何か願いごとや頼みごとをするときに、神仏の前で手を合わす習慣があるのみです。ただ、食事の前に手を合わすと、誇れるところではありますが、現代は、そうして手を合わす若者も少なくなりました。

道元禪師が教えてくださったているのは、坐禅の心、平常心の大切さであると思うのです。坐禅の心は、そのまま、仏の心であり、その実践している姿はそのまま仏のお姿。この坐禅の心は、日常生活の瞬間瞬間にでも実践できるのです。

ごはんを食べるときは、ごはんをいただく。栄養とか味とか、健康とか気にせずに、ただ、ありがたくいただく。お茶を飲むときは、その瞬間に命をかけて一所懸命、ただ、お茶をいただく。お茶を飲めばうまいだろう、癒されるだろう、こうなるだろう、ああなるだろう、などと雑念を入れずに。

道元禪師がまた青年修行僧だった頃、あるお寺に病氣見舞いのために先輩僧を訪ねたときのことで。炎天下、庭で、シイタケを干している白髪の老人がおりました。暑いのに笠もかぶらず、腰は折れ曲がりよろけそう、汗だくになりつつ、焼ける

ほど暑い敷石の上に、一枚、一枚、ていねいに並べているのです。その老人は、典座てんざ（食事の支度）の仕事をする老僧でした。若き道元禪師は、思わず、「ご高齢の老師がそんな仕事をなさらずに、誰か若いものにやらせてはいかがですか」と声をかけました。すると、老僧は、「他の人のしたことは、私のしたことになりませんよ」と微笑まれる。それでも道元禪師が、「ならば、お体にさわるといけませんから、少し休まれてはいかがですか」というと、「今のこの一瞬は、今しかないのです」。道元禪師は、その老僧の言葉をきき、愕然としたのです。過ぎ去ったとき

は再び戻らず、不確かな未来は、割れたコップの破片と同じで、どのように割れるかわからない。この世の中で、最も確実なのは、『いま・ここ』の一点のみなのです。自分の健康や暑さや、そんなものに一切とらわれず、その一点に全エネルギーを集中して生きる。その老僧の典座の仕事は、坐禅修行と何ら変わるものではない！と、道元禪師は気づかれたのです。

「いま・ここ」に全エネルギーを集中して生きることは、私たちの日常生活にわたって、実践できることです。いつも「平常心」で生きている人は、意識することなく自然に、布施つまり

ワットパクナム河北副住職にご挨拶される方丈



功德・タンブンの精神が生まれ、むさぼらず、へつらわず、物も心も惜しみなく、「させていただく」

気持ちに充たされているのです。そして、生きとし生けるすべてのもの・人にも、慈愛を持って、我が子に対するがごとく思いやり深いやさしい言葉をかけることができます。

自分が生かされていることに感謝し、人々が得するよう、幸せになるように願

うことになりました。そして、海があらゆる川の水を拒まないで受け入れるがごとく、自分と他人を区別しないで、生きとし生けるものをすべて救おうとする。

この布施、愛語、利行、同事の四つの真実の智慧を、道元禅師は、「発願利生」の教えとして伝えてくださっています。発願利生の生き方をしている人は、そのまま、坐禅修行をしていると同じであり、生き方そのままが、仏さまのお姿であると思うのです。

それは時代がどんなに変化しようとも、変わることはない、人間の根源的な美しく正しい生き方です。「今」を生きる人が、

どの時代にも、仏さまの心、お姿で生きたとき、この世の中から、争いや憎しみといった言葉は消えてなくなることでしょう。

私は、坐禅をし、気持ちちが透明になつたような瞑想中に、ふっと浮かぶ智慧、これは、仏さまが囁いてくださったお声だと思つて、いるのです。「現代社会は破滅に向かつて突き進んで、二十世紀に向かつて、今、地球は悲鳴をあげているぞ。救いを求めているぞ。おまえは今、何をすべきなんだい？」無意識の中から沸き起こるそんな思い。

そんな私は、仏教を後世に正しく伝える若者を支援し、さらに海外に留学僧を派遣しておりますし

た。今から十八年前のことです。毎年毎年受け入れ、そして派遣し続けて、現在、留学僧は百六名、関係国はアジア欧米含めて二十カ国一地域、派遣国は十四カ国にのびりました。

当時私は、横浜善光寺を開創いたしましたから僅か十五年。

そんな時分、一寺の一住職が実践するには、あまりにも無謀な壮大すぎる誓願でした。あの頃、それまで、生かされてきたことに対し、何か報恩できないかと常々思つておりました、そんな中、坐禅中「み仏」のお声を授かったのです。あとは、み仏におまかせするだけでありました。

そう、私自身が発想し、祈願



し、行動を起こしたというよりも、み仏に身も心もおまかせしていたら自然に導かれていったという感じなのです。

もしも、自分の行動が正しく、それがみ仏のお智慧ならば、自分がかんばろうとしなくても、必ず、花は開きます。現に私には、次々に、まさに「仏さまの化身」とも思われるような協力者が現れ、私を生かしてくださいのです。

そして、地球的な規模で将来を見つめることができる広い視野をもち、仏法をもって世界平和に貢献していこうとする、輝く瞳を持つ若者たちがどんどん誕生して参りました。彼らは、

その子々孫々へと、真の釈尊の教えを伝えていってくれることでしょう。

今は、小さな種。しかし、どんなに小さな種でもいつかは芽をふき、大木となり森林となる。

地球人一人ひとりの心の中に、「大宇宙の真理」坐禅の心があるまま息づいており、そこには、

国籍、民族、宗教宗派、文化、習慣、言葉、老若男女そうした垣根をいっさい越えて、一つの「いのち」として全人類が調和している未来が必ずあることを私はかたく信じています。

あなた方は、二十一世紀を力強く生きる、無限の可能性を、無限のエネルギーを持つ若き人

類。仏さまの智慧と心が生きている、釈尊の末裔です。どうぞあなた方一人ひとりに、坐禅の心、釈尊の命を次世代に渡す代表選手としてバトンを渡させてください。そして、次の世代にバトンを絶え間なく渡していただきたいのです。

いつか、どうぞ私の寺にもおいでください。もっともっとお話をしたいものです。横浜善光寺は国際的視野を持ついろんな国の若者が出入りして調和しております。未来の地球の小さな雛型のように。

「一期一会」この宇宙からみれば一瞬の出会いを絶好の機会として、またすばらしいご縁が

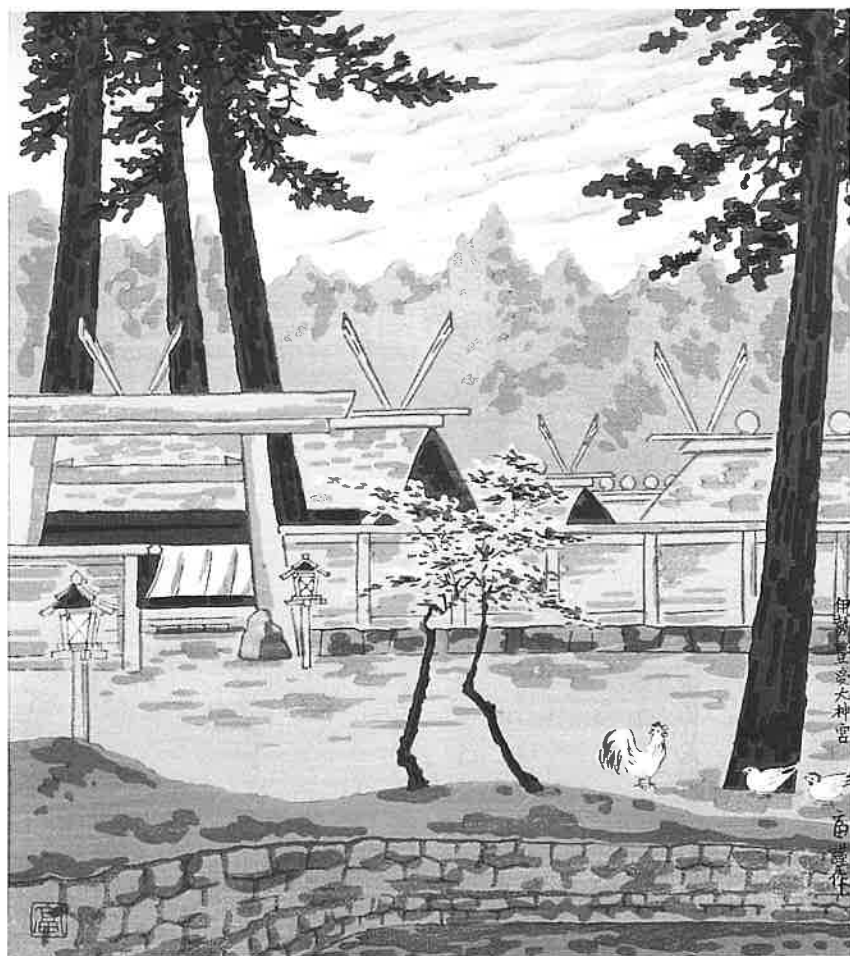
続いていきますように。

日本の坐禅は、あなた方の国の瞑想修行とたいへんよく似ております。さらに、日常生活でいつもいつも他の人に慈愛をもつて接するあなた方のお姿はそのまま、仏さまのお姿です。日本の坐禅の精神そのものです。日本の一部の、すさんで哀しく荒廃している若者にも、その心が伝わりますように、伝えてくださいますように。

本日は、こんなにも多くの澄み切った瞳とのすばらしい出会いを、ありがとうございます。このような機会を作ってください。た世界仏教徒連盟本部の皆さまにも感謝いたしております。こ

れもきつとみ仏のお導き。私の心も隅々まで、さらに清められたような気持ちに致しております。





くらしの中で読む『正法眼蔵』

——面授の巻——

その八

成興寺住職 小倉玄照

〈本文〉

いはゆる、わがくには他国よりもすぐれ、わが道はひとり無上なり。他方にはわれらがごとくならざるともがらおほかり。わがくに、わが道の無上独尊なるといふは、靈山の衆会あまねく十方に化導すといへども、少林の正嫡まさしく震旦の教主なり、曹谿の児孫、いまに面授せり。このとき、これ仏法あらたに入泥入水の好時節なり。このとき証果せずば、いづれのとしか証果せん。このとき断惑せずば、いづれのと

きか断惑せん。このとき作仏ならざらんは、いづれのとしか作仏ならん。このとき坐仏ならざらんは、いづれのとしか行仏ならん。審細の功ふと夫なるべし。

〈現代語私訳〉

世俗では、わが国は他国よりもすぐれているとよく言うが、私が伝えた仏道だけがひとり最高上のものである。まわりの状況をみてみるとわれわれのようには、やらない連中が多

いようだ。わが国の、私が正しく伝えた仏道が最高最上でそのみが尊いというのには（理由がある。）たしかに釈尊は、靈鷲山の道場で法を説き数えきれない多くの人々を教え導いたのであるが、そのいのちの神髄を正しく受け継いで来たのは達磨であり、少林寺の道場で中国の初祖として慧可に正しくそのいのちを伝えたのである。それは伝え伝えられて曹谿惠能に至り、さらにその弟子から孫々そんぞんにいのちを面授し、今、わたし道元に至っているのである。この時こそ、まさに仏法が世俗の中に深く浸透し広まってきたよき時節である。この際、自然の摂理に添いきって修行することがそのままさとりであるということを示さなければいつそれができるのか。この際、横着本性の肥大を断ち切らなければ、いつそれができるのか。この際、背筋を伸ばして自然の摂理に添いきる生活をしなければいつそれができるのか。この際、只管に坐禅しなけ

れば、いつ自然の摂理に添いきった生き方ができるのか。よくよく徹底して功夫をしてみるべきである。

正伝の仏法こそ最上

この段は、読みとりがむずかしい。特に、冒頭のセンテンスは、理づめには中々読みきれず、大いにとまどいを覚えます。

世間一般で言われている我が国は他国よりもすぐれているということ、自分が伝えた仏道だけが特に最高最上であるということは、日本語の文法の常識からすれば、順接の関係になるのです。ところが、それではどうにも意味がすつきりしません。私は、あえて逆接の關係と受けとめて現代語訳してみました。順接にこだわれば次のような意味になりました。どうか。

「世俗では、わが国は他国よりもすぐれてい

るといふ、とりわけ私が伝えた仏道は特に最高最上なのである」

こういう順接的な受けとり方を私があえてとらなかったのは、道元禪師は、日本の国については、決して「他国よりもすぐれ」ているとは思っておられなかったふしがあるからです。例えば、『正法眼蔵』行持（下）の巻には、わが国のことについて、

「われらが卑賤、おもひやれば驚怖くふしつべし、中土をみず、中華にうまれず、聖をしらず、賢をみず、天上にのぼれる人いまだなし、人心ひとへにおろかなり」

と述べておられます。あえて現代語訳する必要もありますまい。わが国は、辺地だから考え方もいやしく劣っている、と嘆いておられるのです。

こういうお言葉からすれば、当然、私の現代語訳のような受けとめ方になるはずでしょう。

世間一般では、わが国は他国よりもすぐれているというが、あながちにそうでもあるまい。私伝えた仏道だけがひとり最高最上のものである、とやうておられるのです。

そして、如浄禪師から親しく伝えられた仏道が、なぜ最高最上のものであるのか、といういわく因縁を簡潔に説き示しておられるわけです。それは、釈尊から代々面授面受によって正しく受け伝えて来たがゆえにひとり最高最上の仏道なのだと言調されている点を私たちは軽く見過ごしてはならないのです。

豊かさが自我肥大を生む

自分が伝えた仏道だけが最高最上で、他の連中の仏道は似え而非せくさい、という言い方は見方によれば、鼻持ちならない自尊心の強さと映るかもしれませぬ。しかし、考えてみますと、(も

ちろん伝説ですが）釈尊がご生誕の直後に発せられた言葉として、

「天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくせん）天上天下、ただ我れ独り尊し）」

が伝えられ人口に膾炙かいしゃしています。自尊心は、人間の生きていくための原点だと考えるのが、仏教の伝統だということを示すエピソードのように私には思えます。心理学でいう「自我」もある意味では、「唯我独尊」と根っこを同じにしていると言えるのかもしれませんが。

もっとも、現代人一般に自我肥大の傾向がみえるのは気になります。誰もがテレビ等で仕入れた情報をもとにして評論家気どりで「唯我独尊」ぶりを発揮しているような点です。これは決して賞められた傾向とは言えません。まずもって自分を客観視する、という姿勢が欠けているように思えるからです。

先年『東大生はバカになったか』といういさ

さか刺激的な立花隆氏の著作のことが気になっていましたら、すかさず『週刊朝日』平成十三年十一月二十三日号が「東大卒は職場のお荷物か」という巻頭特集を組んでいました。「小利口なコマッタちゃん増殖」というコピーにつられて私も購読してみました。

「東大」という具体的名称をあげてことを論じている点にいささかの抵抗を覚えました。しかし、それをいわゆる現代の偏差値競争に勝ち上がった者の象徴と考えたら、そういう問題を論じてみる価値があるのかもしれませんが。おそらく生活体験の欠如した受験専念世代の勝者の尊大な自我肥大の傾向を問題にした特集だろうとは予測がつかしました。一読して私の見当は、おおむね外れてはいませんでした。

「結局、昔ほどの学力がないのに、（オレが世界だ）」という体質だけが身についた、出来の悪い東大卒ほどやっかいなものはない、というこ

とかもしれない」(大波綾記者)

ここでいう学力は、生活体験も豊かで応用力のある総合的学力という意味なのでしょう。

特集中での立花隆氏のコメント。

「東大法学部の連中はこぞって愛校心が強い。彼らに東大卒に教養がないことを指摘すると(自分を除いて教養がない)と考える。僕は本の中で法学部を辛辣に批判したが、法学部卒の人が読んでも(自分以外の話)だから、怒りはしないでだろう。」

尊大な自我肥大が極まるとコマッタちゃんになつてしまう——ということでしょう。しかし、これは何も東大卒に限つた話ではありません。総じて現代人、特に生活体験の乏しい人ほどの傾向が強いように思われます。

その原因は、文明が極度に発達して、手作業や肉体労働を殆どしなくてもよいようになったことに求められます。スイッチやボタンを押せ

ば、テレビやインターネットで誰でもが簡単に情報を入手できます。苦勞して難解な書物を読み込まなくていいのです。お金さえ払えば、何でも入手できます。台所にまな板がなくても、毎日、山海の珍味を食することも可能です。夜業で手袋を編む母さんも殆どいません。銭を払えば、美しく立派な手袋が安価に入手できるのです。

生産や知識の取得に苦勞がなくなれば、当然の帰結として人々は謙虚さを失います。自分の力で何でもできたと錯覚してしまうのです。太平洋戦争の前後に幼少年期を過ごし、厳しい自給自足の生活を強いられた体験のある私たちの世代ですら、いつのまにかそうなつてしまっているのです。ましてや豊かで便利至極な社会で誕生し成長した若い世代になれば、自我肥大が極まって尊大になつても不思議はありません。

私淑する師を持つ

それにしても、現代人の自我肥大による尊大さと、道元禪師が「わが道はひとり無上なり」と断言されるとき「無上独尊」とは、文明の発達による生活の利便さがもたらしているだけのものとも言えないようです。もっと根本的な質的差異があると考えなければなりません。それを明らかにしているのがこの段の眼目と申しでよいでしょう。

それを今流に平たく言えば、人間の正しい生き方を求めて努力している人を自分の人生の師として持っているかどうかが問題になると言っておられるのです。道元禪師が「無上独尊」を自負されるのは、如浄禪師という「無上独尊」の正師を師としてその生き方を慕いつつ生きておられるからです。如浄禪師はまた雪竇智鑑と

いう正師の下でその生き方を全面的に尊崇するという人生を送られたのです。

独尊を自負する生き方は、師が独尊であって初めて可能なのです。それゆえに、師にはその師の独尊の由緒があるはずで、雪竇智鑑の師をさらに遡れば、達磨大師に至り、それをさらに遡及すれば、釈尊に至るわけです。しかも、その尊崇する師は、歴史上の時間を超越して、直接に釈尊であるというのでは駄目なのです。釈尊のいのちを生身のからだだけで伝えつたえて、自分の眼前に生きている人でなければならぬのです。

禅門では「煖皮肉」ということを強調します。温かい血の通っている肉体のことです。釈尊のいのちが煖皮肉として息づいている師について修行したかどうか——それがきわめて重要なのです。

もちろん、無常の世ですから、ある段階でそ

の師は亡くなってしまいかもしれません。しかし、既に幽冥界を異にしても、尊崇する師の生きざまが眼前に彷彿ほうふつとし、生きている人に対するが如くその真影に札拜が行ぜられなければならないのです。

道元禪師は、いわゆる「弘法救生くわうぼうくしやう」を願いとして京洛の興聖寺で教線を張られました。しかし、やがてその活動に行きづまりを感じて苦惱を深められたようです。その時、思いを寄せられたのは、今は亡き如浄禪師でした。亡き師に指針を求められたのです。そして、如浄禪師の祥月命日しょうつきめいにちである寛元元年七月十七日を期して京洛の地を離れ、越前の深山幽谷に修行の拠点を移すことを決行されました。

件の『週刊朝日』の記事における尊大な自我肥大が困った問題となるのは、結局、自分が私淑する師を持っていないからなのです。現代人一般の、自我肥大の傾向についても、やはり同

質の問題が考えられないでしょうか。

テレビとかインターネットでさまざまな情報を安直に得ることができるようになって人間のためによいことではないのです。単なる知識は、それがいくら沢山取得されても、この世を生きて行く力とはならないのです。私淑する人生の師は、そこからは決して得られないからです。

人生を生きて行くときに一番大切なものは何か。それは知識の多寡とは関係ありません。つまるところ、人生を真剣に生き抜こうと努めている人の煖皮肉にふれて感動することなのです。そしてその人に全面的に私淑して生きようと志すことなのです。

今、日本の教育に一番欠けているのは、その問題なのです。



檀溪普光寺

沙阳

三六九



現代社会と仏教

愛知学院大学教授

引田 弘道



一、現代社会の抱える様々な問題と仏教

現代日本において、私達は様々な社会問題に直面している。新聞紙上でもよく目にするのは、家庭内暴力(DV)、保険金詐欺目的の殺人事件、

若者の暴走とそれとは逆の家庭内引きこもり等である。国外に目を転じれば、昨年九月のニューヨーク世界貿易センターでの事件以来、キリスト教社会とイスラム社会との亀裂がどんどん深刻化している。最近、インドネシアのバリ島で

起こった爆弾テロは、西洋化された観光地に対するイスラム原理主義者の反発により引き起こされた、との見方が強い。この島はイスラム国インドネシアにあつて唯一ヒンドゥー教を信仰しており、「神々の島」として日本でも人気の高い地であつたため、テロのシヨックは想像を絶するものであつた。

このような現代社会の抱える問題に仏教は何かの解決の糸口を提供することが出来るであろうか。葬式・年忌法要といった葬送儀礼を布教活動の中心とする現在の仏教がこのような社会問題に取り組むことはたして可能であろうか。特に現代日本で大きくクローズ・アップされている心の問題を、仏教は何らかの形で解決することが出来るか。そのためには今一度仏教の原点である釈尊の生涯を再考してみる必要がある。

二、釈尊の出家の動機と悟り

釈尊は二十九歳のとき、愛する妻と子を残して出家した。彼の出家の動機は「生死の克服」と一般的に考えられている。四門出遊の出来事は、人間の必ずたどるべき老・病・死と、沙門という俗世間を離れた苦行の実践者を説いている。沙門こそ釈尊が選択した道であつた。これは道元禪師も「生を明らめ、死を明らむるは、仏家一大事の因縁なり」と強調されている。釈尊は六年間、断食などの激しい苦行の後、苦行自体の無益さを悟り、禪定を中心とした、世俗の生活と苦行の中間の実践である「中道」を標榜した。禪定によつて自身のうちに湧き出る智慧をもつて現実存在をありのままに見ること(如实知見)こそ、自己のうちなる葛藤を鎮め真実の自己を実現する手段と考えた。つまり生死の克服は禪定と禪定によつて生じる智慧をもつて

完成されたのである。釈尊の悟りは縁起の法とするのが一般的であるが、それは智慧をもって如実知見を實現し、人間の本質的無知である無明を滅却すれば、それを原因とする人間的苦しみは自然となくなるというものであった。

以上のような釈尊の思想は、彼の最初の説法である初転法輪の内容である四聖諦の道諦にいう八正道によく示されている。つまり釈尊の教えを信奉し、それに従った生活を行動・言葉・心の三方面から実践し、禪定を修すれば、仏教の理想の境地である滅諦が現成するというものである。仏の教えを信じ、ただひたすら正しき生活をおくり、禪定に邁進することこそが、生死を超越する方法であると説いている。道元禪師も「生死の中に、仏あれば、生死なし。但生死、即ち涅槃と心得て、生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ぶべきもなし。是時、初めて生死を離るる分あり。」と、生死と涅槃とを両

極にあるものとせず、一体のものとして蕭々と修行を続けることを説いておられる。釈尊の實踐修行は出家者を対象としたものであったが、在俗の生活を送る人も仏・法・僧に帰依し、報いを受けるまでは決して止むことのない罪業の恐ろしさを信じて五戒を守る規則正しい生活を送れば、煩惱を完全に滅しもはや再生しない阿羅漢といった修行僧の目的は達成できないまでも、功德を積んで神として生まれる果報を得ることが可能だとされる。つまり修行僧と在俗者とはその最終目標にレヴェルの違いはあるものの、それはそれとして納得できるものである。道元禪師も、在俗者は自らの罪業を懺悔すれば、仏の功德の力で罪を軽減し、あるいは清浄となることさえも可能であると説いておられる。

三、心の病の治療と日々の生活

このように釈尊や、道元禪師は、生死と涅槃とを相対化せず、それらにとらわれずに、三宝に帰依し、毎日の生活を一生に一度しかないと大切に過ごすことが一番肝要であると強調している。道元禪師も「設ひ百歳の日月は、声色の奴婢と馳走すとも、其中一日の行持を行取せば、一生の百歳を行取するのみに非ず、百歳の他生をも度取すべきなり。」と説いておられる。

ところで、現在の日本社会では家庭内暴力、心身症といった「心の病氣」、あるいは病氣までいかなくても「癒し」を求めることが一種の流行のようになってきている。筆者が勤務する愛知学院大学には文学部心理学科があり、以前からその人気の高さは群を抜いていたが、四、五年前に大学院が日本臨床心理士資格認定協会より「臨床心理士」受験資格取得指定校（一種）に認定されていらい、大学院、学部とも希望者が殺到している。これは単に就職に有利という理由ば

かりではなく、人間の心理、特に「自己の心の分析」に興味を抱く学生が増えてきたことに起因しよう。中部地区でもこの受験生の要望に応えるかたちで、人間学部、社会心理などの名を冠した学部、学科が増設されており、愛知学院大学でも、平成十五年度より文学部心理学科を改組して、心身科学部を新設する予定である。

これは人間の心と身体の両面を科学的に考究するものであり、日本でも珍しい学部となろう。

ただ、人間の心理は、心理だけに焦点をあてて研究したとしても、はたして解明され得るであらうか。人の心は「心、ころころ」と言われるくらい、常に変化し捉えようのないものであり、他人はおろか本人さえも理解し難く、制御し難いものである。釈尊は「五蘊無我」を説くなかで、この五を物質（色）と、心作用の受・想・行・識に分類したが、ただ心の分析ばかりに頼るのではなく、正しい生活と、如実知見と

いう智慧を産み出す禪定という実践とを強調した。つまり「心とは何か」とらわれた偏狭な態度は無意味で無益としたのである。アトピーのような皮膚病を治療するのに、患部に薬を塗るだけでは完治しにくく、むしろ身体全体の悪気が皮膚に現われたと考えて、身体全体を治す対策のほうが回り道でも完治に至るように、自分の心が分らないからといって心理学をいくら勉強しても、理解出来ないままで終わるのではなからうか。むしろ心にとらわれず、心を放下することこそ必要なのではなからうか。筆者は心理学という学問自体を無益だと言うつもりはないが、心理学を勉強さえすれば自己が救われるという考えには疑問を呈したい。

四、正しい生活とは

釈尊や道元禪師が出家至上主義者であり、在

家信者を一段低く見ていたという説もあるが、筆者はそう考えない。確かに釈尊は家庭生活を放棄して苦行の道に入ったのであるし、道元禪師も釈尊の修行主義を追体験する立場をとられた。しかしながら両者とも在家信者を排除したのではない。禪師も「仏祖憐みの余り、広大の慈門を開き置けり。是れ一切衆生を証入せしめんが為めなり。人天誰か入らざらん。」と明白に仏の慈悲の広さを説いておられる。そして在俗信者たちは「我昔所造諸悪業、皆由無始貪瞋痴、從身口意之所生、一切我今皆懺悔」と日々の自ら犯した罪を反省することこそ、彼らが救われる方法とされている。ここで重要な点は、二つある。一つは在家信者が仏・法・僧の三宝に帰依していること、つまり仏教の説く教えが彼らにとって信用に足る倫理規定であることが定着していること。もう一つは業と輪廻との不可分性である。人間の犯した悪業はたとえその人

間が死んでも消滅することはない。その悪業の報いを受けるまで決してなくならないのである。人はその死をもって終結するのではなく、悪業が残っている限り未来永劫輪廻し続ける。

ところで現在の社会状況を見ると、拜金主義は横行しているものの、仏教の倫理規定は意外なほど信用されていない。摂律儀戒、撰善法戒、撰衆生戒の三聚淨戒や、不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不酤酒戒、不説過戒、不自讚毀他戒、不慳法財戒、不瞋恚戒、不謗三宝戒の十重禁戒の思想が我々に定着しているとは到底言えない。江戸時代まで日本人の精神的支柱であった儒教思想や仏教思想は、明治になりヨーロッパの合理主義が入ってくると、だんだん弱まり、戦後アメリカの文化や思想が横行するに連れ、江戸時代までの精神文化は完全に忘れ去られてしまったと言えよう。だからまず我々は忘れ去られてしまった、布施・愛語・利行・

同事という菩薩の誓願に代表されるような他者を思いやる仏教精神を思い起こす必要がある。他者との競争に疲れ果てた現代人にとって、他者を愛する気持ちを再び取り戻すことが、回り道ながら一番の心の救いになるのではなからうか。このような仏教思想を社会的に喚起することは我々仏教に携わる者の使命であろう。

次に必要なのは規律正しい生活である。これは既に心身症の治療として寺院での集団生活の効果唱えられているが、そこまでいかなくても個人で規則正しい生活が無理ならば、何らかの形の施設で集団生活を送る必要がある。現在末期医療の一環として、キリスト教ではホスピス、仏教ではヴィハーラの重要性が叫ばれているが、それを心の病に苦しむ人たちに適用することである。そこでは仏教精神のもとに集団で規則正しい生活を送ることにより、彼らの心のケアをはかっていきたい。彼らはもちろん

修行僧ではないのだから、苦しい修行をする必要はないし、彼らが望めば朝職場に向かい夕方帰宅することも可能である。他人を慈しむ気持ちをもって自己の行為を反省することを毎日繰り返し、皆で助け合う互助の生活を送ることこそ、彼らの傷んだ心を治すことが可能になるのではなからうか。そのような僧侶と臨床心理士とが一体となつた仏教施設が出来ることが今一番望まれているに違いないと、筆者は確信する。



大教師補任・赤紫恩衣被着特許
曹洞宗特別奨励賞受賞

太祖瑩山禪師さま報恩顕彰碑建立（京都清水寺）

黒田武志老師・倫子令夫人祝賀会

大きな節目をともに祝い、
これからの歩む道を思う





壇上に並べられた来賓の皆様。左から板橋興宗大禅師猊下、伊東盛熙總持寺監院、奈良康明曹洞宗総合研究センター所長、横山敏明全国嶽山会会長、熊谷豊太郎善光寺檀家総代表



第二部のスタートは、鏡開きされた樽から注がれたおめでたいお酒で、まず、乾杯。ご発声は黒田老師と旧知の中である東京吉祥寺住職、岩本昭典老師



瑩山禅師さま顕彰碑の撰文をされた東隆真駒澤女子大学学長からは、お祝いの言葉とともに、改めて顕彰碑の意義をご紹介いただきました。左は発願主の黒田倫子令夫人



在日スリランカ大使から大切な人への贈り物「ワタパタ」を贈られる黒田老師



第二部の締めには、檀信徒のみなさんも壇上に上がって声高らかに“善光寺の歌”を大合唱(写真上)。顕彰碑のスクリーンを背景に舞台では津軽三味線のアトラクションが祝賀会を盛り上げました(写真中)。当日のお客様デビ夫人を囲んで、滝沢令夫人(左)倫子夫人(右)(写真下)



すでに前号で紹介したように、成寿山善光寺には黒田老師の「大教師補任・赤紫恩衣被着特許」「曹洞宗特別奨励賞受賞」が、また、倫子令夫人には京都清水寺の「太祖瑩山禪師さま報恩顕彰碑建立」と大きな喜びのできごとがありました。

これらの記念すべき事業を一つに集めた盛大な祝賀会が、去る平成十四年二月二十八日、横浜プリンスホテルで行われました。



黒田老師はエネルギーの塊です。

あらゆるものに

ファイトを燃やしています。

大本山總持寺貫首・板橋興宗大禪師猊下

● 温かい激励の言葉の中で

当日、定刻の午後六時には会場の横浜プリンスホテル桜の間は宗門の関係者や縁者など駆けつけた約五百六十名の参加者で埋まりました。祝賀会はまず、発起人の代表でもある全国獄山会会長・横山敏明老師の開会のご挨拶から始まりました。「黒田老師は新寺建立以来、持ち前の明るさと初発心時の気持ちに絶やすことなく今日まで続け、ようやく近年になって大きく花を咲かせました。それが、曹洞宗でも数少ない最高位を表す赤紫恩衣の着用を許され、若年にして大教師の位を授けられた理由です」。

続いて、曹洞宗総合センター所長・奈良康明氏（元駒沢大学学長）は経過報告として、黒田老師の奨励賞受賞と大教師の位を与えられた理由に「国内外に仏教を興隆する留学僧育英会による功績」「宗派を超えた提携の先駆けとなった令夫人の顕彰碑建立による功績」「季刊誌



新寺建立以来、持ち前の明るさと
初発心時の気持ち絶やすことなく
今日まで続けられました。
全国獄山会会長・横山敏明老師

『成寿』『道元の二十一世紀』の刊行などによる
教学振興助成の功績」の三点を挙げました。

宗門からは、大本山總持寺貫首・板橋興宗大
禪師猊下より「黒田老師はエネルギーの塊です。
あらゆるものにファイトを燃やす。外からのお
布施を布施行として至るところに施しておられ
ます。スリランカの大僧正から『キリスト教に
はローマ法王庁が、イスラム教にもメッカがあ
るように、世界中の仏教徒が集まる場所が日本
にできないだろうか』と話がありました。そ
の役を担うのは黒田老師が適任ではないかと思
いました」との祝辞が励まし言葉とともに贈
られました。

さらに、総和会会長・佐伯逸雄氏から「どん
なことにも「人」が大切。黒田老師はその
「人」に注目して、三十年余りをかけて育成に
力を注いでおられます。このことが宗門にとつ
ていちばん貢献しています。慈悲とか、人徳は
普通目に見えないものですが、黒田老師にはそ



黒田老師には目に見えないはずの徳が見えます。それは実践の中で培われているからです。

総和会会長・佐伯逸雄氏

れが見えます。それは実践の中で培われた尊いものであるからです」。

總持寺監院・伊東盛熙氏からは「三十余年の間、終始一貫して、国際人材の養成、不況拡大に専念されたことは宗門の誇りであり、あらためて敬意を表します。このような不透明な時代だからこそ、老師のような実践力が必要で、それが道標となり、宗門活性化の原動力になると確信しています」。祝辞には併せて、老師を支える倫子令夫人の陰の力と篤い信仰心にも触れられていました。

留学僧の交流だけではなく黒田老師が広く国際親善に力を注いでいるスリランカ政府からは、スリランカ全権委任日本大使・カルナティカラ・アムヌガマ閣下がご出席になりました。「まず、スリランカの代表としてご挨拶します。お二人は日本だけではなくスリランカにも大きな貢献をされています。私にとっても大切な特別な方です」と紹介しながら、スリランカ

老師の実践力は宗門の道標となり、
宗門活性化の原動力に
なると確信しています。

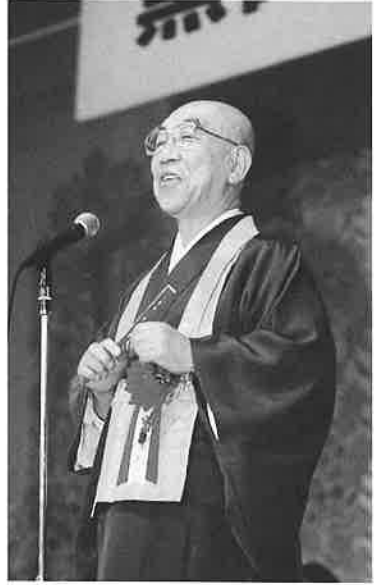
總持寺監院・伊東盛熙氏



で一番大切な人への贈り物として使われる「ワタパタ（授戒に使う大扇）」を黒田老師と令夫人に贈りました。

宮林浄土宗光明寺法主は黒田老師との出会いから始まり、宗門の最高位に登られ仏祖に立ち返って宗派を超えることを説いた名僧増上寺の福田行誠上人の姿に老師夫妻を重ね「希望を見失った時代に黒田老師は火の玉のようになって、寺庭のあり方を示しておられます。仏道に生きる出家者のあり方として、学ぶところが多い」と大きな賛辞を贈りました。

そして、皆様からいただいたご祝辞にお答えするように、檀信徒代表総代熊谷豊太郎氏が「私たち檀信徒は住職を中心として心の通いあう固い絆で結ばれています」と結び、「皆様のお祝辞通りに歩んでいきたいと思えます」と黒田老師が謝辞を述べ、曹洞宗宗義会議員の洞外文隆氏が「育英会で育った国際的に通じる人材が世界中で活躍することを祈ります」と挨拶。



老師の姿は仏祖に返って

宗派を超えることを説いた

増上寺の福田行誠上人に重なります。

宮林浄土宗光明寺法主

第一部の幕を閉じました。

●和やかな語らいとともに

第二部は壇上に上った十七人の来賓によるおめでたい鏡開きからスタートしました。鏡開きが続いて、曹洞宗参議東京吉祥寺住職岩本昭典老師のご発声で乾杯。横浜善光寺留学僧育英会理事でもある駒澤女子大学学長・東隆眞氏、友人代表として大雄山最乗寺山主石附周行老師など、仏教界の重鎮に混じって、デビ・スカルノ夫人のご挨拶などもあり会場は盛り上がりしました。

善光寺婦人会会長伊東初枝様より倫子夫人に花束贈呈。同じく、錦戸節子様より黒田老師に千羽鶴が贈呈されました。

津軽三味線の演奏や獅子舞のアトラクションが続いて、成寿山善光寺開基家代表として東郷敏氏の謝辞、神奈川祖門会会長岡田哲道老師の

喜びの気持ちは老師ご夫妻よりも
私たち檀信徒の方が
むしろ大きいかも知れません。

東郷敏様



閉会のご挨拶で盛大な祝賀会は幕を閉じました。

黒田老師ご夫妻に寄せられた賛辞や祝賀の声は会が終わってもしばし会場に余韻を残していました。さまざまな方からいただいたお言葉の一つ一つは、善光寺の檀信徒にとっても大きな誇りであり励みでもあります。これからもこうした喜びの時に出席できるように、老師とともに一日一日を大切にしていきたいと思えます。



大教師補任・赤紫恩衣被着特許
曹洞宗特別奨励賞受賞

太祖磐山禪師さま報恩顕彰碑建立

成寿山善光寺

住職 黒田武志老師
寺族 倫子令夫人

祝賀会

第一部

●開会の挨拶

全国嶽山会会長

横山敏明老師

●経過報告

曹洞宗総合研究センター所長

元駒澤大学学長

横浜善光寺留学僧育英会理事

奈良康明先生

●祝辞

曹洞宗管長大本山總持寺貫首

板橋興宗大禪師猊下

総和会会長

佐伯逸雄老師

大本山總持寺監院

伊東盛熙老師

スリランカ全権委任日本大使

カルナティカラ アムヌガマ閣下

通訳 バーナガラ ウパティツサ大僧正

浄土宗大本山光明寺法主

宮林昭彦猊下

成寿山善光寺檀家総代

熊谷豊太郎様

●謝辞

成寿山善光寺住職

黒田武志老師

横浜善光寺留学僧育英会理事長

●第一部閉会の挨拶

曹洞宗宗議会議員

洞外文隆老師

第二部

●鏡開き

元大本山總持寺監院 山形 善宝寺
 前大本山總持寺監院 大阪 臨南寺
 大本山總持寺祖院西堂 静岡 宝持寺
 大本山總持寺祖院監院 愛知 宝泉寺
 元曹洞宗宗務総長 愛知 万松寺
 前曹洞宗宗務総長 新潟 養広寺
 覚王山日泰寺代表役員
 衆議院議員 東北福祉大学学長
 衆議院議員
 財団法人仏教伝道協会会長
 立正佼成会理事長
 財団法人国際仏教交流協会理事長
 全日本仏教婦人連盟理事長
 株式会社板橋社長
 東亜建設工業株式会社社長
 株式会社鳳友産業グループ会長
 日広建設株式会社社長

●乾杯

曹洞宗参議 東京 吉祥寺
 横浜善光寺留学僧育英会顧問

●挨拶

ラトナ サリ デヴィ スカルノ様

駒澤女子大学学長

横浜善光寺留学僧育英会理事

東隆眞先生

友人代表 大雄山最乗寺山主

石附周行老師

●花束贈呈

善光寺婦人会会長

伊藤初枝様より黒田倫子夫人へ
 錦戸節子様より黒田武志老師へ

●津軽三味線

(三味線) 白濱政則 白濱克子 吉田幸江
 富沢八重子 飯沢優子(和太鼓) 橘六央 橘美鈴
 (尺八) 鈴木淡宝
 獅子舞

●謝辞

成寿山善光寺開基家代表

東郷敏様

●閉会の挨拶

神奈川県祖門会会長

岡田哲道老師

岩本昭典老師

発起人の皆様

全国嶽山会会長

曹洞宗宗議会議員

曹洞宗宗議会議員

神奈川県東部総和会会長

神奈川県東部有道会会長

神奈川県東部嶽山会会長

神奈川県祖門会会長

神奈川県第二宗務所所長

神奈川県第二宗務所第五教区教区長

駒澤大学総長

鶴見大学学長

駒澤女子大学学長

善光寺護持会会長

善光寺事務局長

善光寺総代代表

総代一同

横山敏明老師

洞外文隆老師

渡邊孝彦老師

渡辺道春老師

赤間喜芳老師

鈴木義昭老師

岡田哲道老師

市川智彬老師

篁 素明老師

松田文雄先生

高崎直道先生

東 隆眞先生

越石周平先生

富永 豊重様

熊谷豊太郎様



壇上で石附周行老師から祝辞を受ける黒田老師と倫子夫人



熊谷豊太郎様より檀家総代としての祝辞（写真上段右）。鏡開きの樽に向かう齊藤信儀老師、桑原眉尊老師、沼田智秀先生（左から、上段左）。閉会の辞は岡田哲道老師（中段右）。祝賀会の中は終始和やかに。加藤大真様、江川辰三老師（左から、中段右）。控室で久し振りの再会に話が咲く、岩本昭典老師と黒田老師（左から、左上から3枚目）。会場にひとときわ華やかさを添えた獅子舞（左下）

スリランカ全権委任日本大使

カルナティカラ アムヌガマ閣下のご祝辞

<和訳>

本日、成寿山善光寺住職黒田武志老師の榮譽を称えた祝賀の席に招かれましたことは、大変名誉なことであり心からお礼を申し上げます。

横浜善光寺の住職として、同時に横浜善光寺留学僧育英会理事長として、老師の日本と海外への貢献と、功績は誠に目覚しいものがあります。スリランカの人々は、老師の親切と雅量に多大の恩恵を受けております。この良き日にあたりまして、東京の駒澤大学より仏教布教の功績に対して奨励賞を受賞されましたことに、わが国の国民と政府に代わり、心よりお祝い申し上げます。更に老師が、曹洞宗大教師に補任されましたことも合わせて、お慶び致す次第であります。

今年は、日本とスリランカが外交関係を樹立して 50 周年を迎える年であります。皆様ご承知のように、両国の文化的、精神的な絆は、両国の多面的な関係の中でも、最良の部分を占めています。両国共に人口の大部分が、それぞれ仏教徒であることが、共通面の多い両国の文化の形成に、大きな役割を果たしたと思います。また、両国の仏教会の組織の頻繁な交流が、文化、宗教面での結びつきの発展に貢献し、更に重要なことには、両国の人々の相互理解と友情の発展にも寄与



したことであります。

スリランカは仏教の国であることから、「布施」という概念は生活の一部として受け入れられてきました。この中で最も崇高な行為とされているのは角膜の贈呈であります。スリランカはこれまで3000個の目の角膜を日本の必要とする人々に寄付してきました。この記念すべき50周年を意義ある年にすべく、スリランカでは50個の角膜を日本に贈呈するための準備を行っています。私たちは、スリランカと日本の交流の歴史の中におけるこの重要なイベントは、角膜の寄贈により50人の日本人がスリランカの目で見える機会を与えられた時こそ、完全なものになると信じます。

文化的な祝典では、横浜市長と、みなとみらいライオンズクラブの支援の下に横浜で、イベント「スリランカ文化の夕べ」を計画しています。今年は横浜善光寺と有志の皆さんが、ぜひ記念式典に参加されることを歓迎致します。

最後に、聖なる三宝の恵みが老師にもたらされ、その健康と今後の発展に更なるご加護がありますように。

ご静聴ありがとうございました。

碑文の英訳が完成

かねてからハーバード大学のダンカン・ウィリアムズ教授に依頼して進めていた顕彰碑の英訳がこの程完成しました。東隆眞先生の撰文による顕彰碑の意義と格調の高さを伝えています。

ここにご紹介します。

〈原文〉

曹洞宗太祖常済大師瑩山禪師と清水の観音さまとの深いえにしを報恩顕彰する碑

曹洞宗太祖常済大師瑩山禪師（正中二年・西暦一三二五年示寂）は、鎌倉時代の末、越前（福井県）に降誕された祖師である。大師の自らの記するところによれば、大師は、幼少のころ、御祖母の明智さまに育てられた。明智さまは、曹洞宗高祖承陽大師道元禪師に聞法し参禅された。

明智さまは、そのむかし、七、八年間にわたって、肉親の前から姿を消したことがあったが、のちに大師の母君となる懐観さまは、その消息をさがし求めて、清水の観音さまに日参し、明日は満願という六日めに、路上に小さな十一面観音さまの頭部を見つけ、これを拾いあげて、もし母の様子がわかれば、この観音さまを補修したいと祈ったところ、願いは叶えられて、母君の明智さまと再会することが出来た。爾来、御祖母、御生母の深い観音信仰に育まれて成長した大師は、能登

（石川県）に洞谷山永光寺を開いて、かの十一面観音さまを奉安する円通院を建て、永光寺を女人に仏法のご利益がゆきわたる祈りの道場とし、また諸嶽山総持寺を開くにあたり、門に入つて諸堂棟を廻願すれば、清水寺のごとく、壮観であり、ここは仏法の縁が熟した霊場であると瑞夢を感じた。果して、仏祖正伝の法は、大師とその門流に至つて、飛躍的、爆発的に伸展したのである。

ここに、越前に生を受けた篤信の人、神奈川県横浜市成壽山善光寺の黒田倫子夫人は発願して、資を投じ、大本山清水寺の御理解と大本山総持寺の御庇護のもと、常済大師、御生母懐観大師、御祖母明智優婆夷三代と清水の観音さまとの深い仏縁を顕彰し、永くその恩徳を讃える碑を建立するものである。

（末孫文学博士東隆眞撰）

平成十三年吉月吉祥日

Commemorative Monument for Zen Master Keizan, the Great Patriarch of the Sōtō School

Japanese Sōtō Zen Buddhism was established during the Kamakura period (1185-1333) by Zen Master Dogen (1200-1253) at Eiheiji Temple in Echizen Province. (Fukui Prefecture). This transmission was called “the correct Dharma of the Buddha Ancestors” by Dōgen. This line was continued by the fourth generation Zen Master Keizan (circa. 1268-1325), his disciples, and their descendents centered at Sōjiji Temple in Noto Peninsula (Ishikawa Prefecture). This school eventually became the Buddhist organization with the largest number of temples in Japan.

Zen Master Keizan was born and raised as an only child to a family with deep faith in Kanzeon bodhisattva. His mother was further influenced by her own mother who was a devout Buddhist with faith in Kanzeon bodhisattva. Thus, Keizan’s Zen cannot be understood without the significance of Kanzeon, the bodhisattva enshrined here at Kiyomizu Temple. Keizan’s whole religious life was sustained by his mother and grandmother’s faith in Kanzeon, Kiyomizu Temple’s object of worship.

Kuroda Michiko was a part of the temple family at Yokohama’s Zenkōji Temple. Having great respect for Zen Master Keizan and born in the same Echizen Province this monument has been erected through her efforts.

English Translation by
Duncan Williams (Ph.D., Harvard University)

〔目的〕

佛教を修学する者のうち、学業操業ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1. Zen Center of Los Angeles (L A禅センター)
“923 S.Normandy Ave., LA., CA90006 U.S.A”
2. Zen Mountain Center of New York (NY禅センター)
“Box 197,Mt.Tramper,NY 12547 U.S.A”
3. Zen -Zentrum Eisenbuch (アイゼンバッハ・禅センター)
“Eiscnbuch 7 D-84567 Erlbach Deutschland Germany”
4. Wat Paknam (ワットパクナム)
“Bhasichareon Bangkok 10160 Thailand”
5. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内佛教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成16年4月より1年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する
必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1. 論文(次項による)
 - 論題
 - ①これからの国際興隆と仏教の役割
 - ②世界平和と仏教徒の誓願
 - ③留学僧として私はこれを学びたい
 - ④異文化の中で仏教を学ぶいずれか一題を選ぶこと 400字詰原稿
用紙5枚以上(A4版タテ書き)
2. 保証人と連署した願書
3. 卒業証明書
4. 履歴書
5. 推薦書
6. 健康診断書

〔募集人数〕

平成16年度2～3名

平成15年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

平成16年1月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会

〒234-0053 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

第 20 回 生

横浜善光寺 留学僧募集

平成16年度・2004

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。



ZENKŌJI
YOKOHAMA

日本仏教における聖水

『真言宗のケーススタディ』

カリフォルニア州立大学アーバイン校 助教授

ダンカン・隆賢・ウィリアムズ

一九九八年に横浜善光寺育英僧の奨学金をいただいたこともあり、私はハーバード大学院の博士号を取得することが出来ました。そのご縁はこうじて、学術的に私が仏法を学ぶ場を得たり目標としていたゴールに到達出来ただけでなく、精神面でも多くを学び、内面を切磋することも可能としたのです。ハーバード大学院を卒業後、私は助教授としてカリフォルニア州立大学アーバイン校に勤務することとなりました。また、大学での教鞭に加え、ロサンジェルス周辺の仏教寺院で、布教活動の手伝いを行えばと願っています。私の博士号論文は、横浜善光寺と宗派を同じくする曹洞禅についてでした。徳川時代に発展した曹洞宗についての私の論文は、二〇〇三年にプリンストン大学出版社から出版される予定です。

その他に私が行ってきた研究をご紹介します。一つは Buddhism and Ecology (「仏教とエコロジー」という本で、ハーバード大学出版社から一九九七年に初版されました。もう一つの本は、American Buddhism (「アメリカにおける仏教」といい、カーゾン・プレス出版社から一九九九年に出ています。二〇〇二年から二〇〇三年の間は、カリフォルニア州立大学アーバイン校から一年の研究期間をいただき、日本に滞在しています。現在私は日本で、今後のテーマである、仏教と温泉の歴史を研究しています。

以下に記す論文は、まだ始めたばかりである新テーマの最初の論文です。このテーマを選ぶにあたり、私は国際仏湯会なるグループを主宰することを決断いたしました。国際仏湯会とは、仏教と関わりのある日本の古い温泉を訪ね、年に四回旅をして、仏教と温泉の意義が重なり合う世界を勉強するグループです。例として、現在までに選



んだ地として、草津温泉、渋温泉、龍神温泉、肘折温泉、修善寺温泉、美ヶ原温泉などが挙げられます。今後行う最新の実地調査会として二〇〇三年の一月に、九州は別府温泉、湯布院温泉、黒川温泉、そして雲仙温泉を巡る計画を立てています。このテーマにご興味のある方は、私が会長を務めます、国際仏湯会のウェブサイトをぜひ訪れていただければと思います。 www.buttokai.net

「聖水」は、世界のほとんどの宗教に見られる現象です。温泉や湖、海に

宿る神は水に帰し、存在そのものを水に吹き込み、自然を超えた力を与えます。「聖水」は儀式や崇拜の対象になり、特別な力が宿っている為に普通の水とは一線を画します。宗教学における「聖水」の研究はかなり長い間行われていますが、この現象における研究は長い間、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教、そしてヒンズー教でなされてきました。しかし「入浴」についての研究は、一般的には近年注目を浴びるようになりました。例を挙げるとイスラム教のハマーム、ユダヤ教の儀式にあるシユヴィツとミクヴァ、ネイティブアメリカンのスウェットロッジと呼ばれるスチームバスがあります。またセブンスデー・アドベンティストや他の

アメリカ宗教グループなどでも、入浴は行われています。

しかし実は仏教における「聖水」の役割や、宗教的観点からの入浴についての研究はほとんどなされていないのが実情です。この論文では特に真言宗に焦点を当てながら、入浴と日本仏教の伝統が交わる点に全体像を置きたいと思えます。世界の三分の二の温泉が日本に存在し、日本人のお風呂好きも知られています。仏教の考えと習慣を非常に高度なお風呂文化に反映・発展させた日本では、その歴史の中、膨大な資料がしたためられました。そして東寺、醍醐寺などの具体的な寺湯と日本での風呂文化を創造した第一人者である、弘法大師空海の温泉発見伝説における役割を例に挙げ、清めと癒しという二つの柱を軸に説明していきたい

と思います。

入浴と仏教：浄化の文化

日本に仏教が入って来た時、入浴を通じて清めの文化が紹介されました。

「ぶつせつおんしつせんよくしゆらうきよまう仏説温室洗浴衆僧教」(別名「たいしやうだいぞうきよまう温室教」大正大藏教七〇一)などの仏典は、身体を清めることにより心も清まるという教えに基づき、入浴を促しました。この観念は、身体の汚れを洗うことによって同時に精神的汚れ、つまりカルマをも洗い流すことになるという汎インドのものと関係しています。

今日のヒンズー教で最も知られているこの習慣が、ガンジス川で見られる沐浴です。特に十三年に一度ガンジス川で行われるマハークンブメラ(Maha Kumbh Mela)という大沐浴は、前世

から積み上げられてきたカルマを洗い流す力があるとされています。

日本ではみそぎ禊またはけっさい潔斎と呼ばれる、清めの仏教以前の観念が存在します。神の目前に立つ前は、さまざま種類の汚れを落とすものとし、宗教的想像と儀式の大切な役割を担っています。

この汚れ落としはカルマを落とすものではないのですが、仏教以前と仏教の概念にある「清め」は、身体をきれいにするのは前もつて必要とされる行為、もしくは精神をきれいにするという共通の観念なのです。

入浴と仏教：清めの文化

仏教が日本にもたらしたものといえば、日本人にとっての新しい興味としての洗浴です。その目的の為に、宗教

的な風呂の施設として温室が建設されました。エドワード・シエファー氏 (Edward Schaeffer) が指摘した中国のケースのように、清めという仏教観念学は、元々僧や尼が修行中に使用していた寺湯の建造物がきっかけで、広く伝わることになったのです。それは特に東大寺、興福寺、唐招提寺のような大規模な寺院にとつては、建立する際に絶対必要な建物となっていたのでした。奈良時代初期、湯屋、大湯屋、風呂、寺湯などと多くの名前で呼ばれていた寺院の湯殿施設は、修行僧や尼にのみ限定された場所でした（例えば儀式の前や神の前に立つ際、事前に自分を清める）。奈良時代初期、入浴とは、修行の一環として考えられていました。つまり、修行不足の僧侶は寺湯には入れなかったのです。さらには、川、湖、

温泉などに浸ることと人間が建てた物に入浴することを対比すると、遡った初期の頃蒸し風呂にはいるというのは、仏教聖職者と貴族階級のみの特権でした。蒸し風呂か湯船を建設するには費用がかかり、さらにその維持費も高くなりました。特にお湯を作る薪は、市井の人にとつて極端に値が張るものだったのです。

忙しい毎日の中でも、第二次世界大戦後の日本人は大のお風呂好きということは知られていますが、日本の長いお風呂の歴史の中ほとんどを通じ、実は入浴とは地域のものでしたのです。現在私達が認識する公衆浴場もしくは銭湯とは、室町時代の間に発展し、徳川時代に人気が出ました。しかしその元祖といふべき存在は奈良時代の寺湯にまで遡ります。奈良時代、そして平

安時代に一層その頻度は高くなったのですが、仏寺は元々聖職者に限定していたお風呂を「慈善事業」として庶民に開放したのです。この慈善事業は施浴と呼ばれる習慣に基づき、僧侶や貴族が庶民に寺湯を開放するため資金を出し、それによってこの世でのより良い人生、ひいては来世の救いも求めようとしたのでした。これらの風呂は施行湯しこうゆや施行風呂、功德湯くどくゆ、立願風呂りつがんぷろなどと呼ばれ、無料でどの階級の人達にも開放された為人気が出ました。その結果、仏教の清めという文化を普及させる重要な仕組みとなりました。施浴の観念は、他人の為、とりわけ乞食や社会的に不利な立場に立たされている人達をきれいにする場所を作ること、基に、それをきれいにするにより自分自身のカルマを落とすという風に

機能していました。最も知られている例では、聖武天皇の妻で、孝謙天皇の母であった、国分尼寺法華寺の光明皇后が挙げられます。伝説によれば、彼女はなんと千人もの人々を対象に、身体を洗う作業を行ったのです。貴族ながらも、実際にお風呂に入りに来た乞食や庶民の背中をこすることで、彼女はこの慈善行為に身を捧げたのです。千人目はハンセン病患者でしたが、光明皇后はその人の背中を嫌がらずに洗っただけではなく、皮膚から膿を吸い出したとさえ言い伝えられています。この有名な場面は「東大寺縁起絵巻」に描かれています。それは、ハンセン病の男性が身体を洗ってもらっているうちに、阿閼の姿を光明皇后に現すというものです。勿論この伝説には、他人の為に何かをする情け深い心を持つと

という教訓的側面もありますが、施浴という観念、そして仏教の物語の多くに関係するメッセージが含まれていることは、注目すべき点だと言えるでしょう。しかし同等に注目すべきは、寺湯では社会的階級が曖昧になり、ハンセン病患者と貴族が、僧侶と庶民が、そして神でさえも自由に入れる場所であった可能性を示唆している点です。

京都にある東寺真言宗の総本山、東寺（正式名〓教王護国寺）は、平均で一カ月に六回施浴を行い、最も知られている施浴の慣例があった場所です。弘法大師空海が別当として任命された時、彼の命により建てられた東寺の風呂は、一九五五年まで「お大師さんの湯」として続けられました。一般の市民が無料で入れる施浴の為に出資する人は、一回につき平均四百文を支払い

ました。寺湯はお風呂に浸かりに来る人にとっても出資する人にとっても全て、清めが出来る「ご利益のあるお風呂」という意味合いを持ちました。また東寺で最も頻繁だったのは、スポンサーなら、自分の先祖の命日に金を払ったり、施浴を受ける側は命日に合わせ風呂に入りに来ることでした。そうすればご利益があると思われるのです。

それと対照に真言宗の醍醐寺の風呂は、庶民対象ではなく、後援者である貴族のみに向けて開かれていました。寺の二カ所、上醍醐かみだいごと下醍醐しもだいごには一一八三年、重源によって資金集めが行われた後に出来た、合計五つの鉄で出来た湯屋がありました。施浴という観念が、湯屋は社会的に平等であるという概念を推進したものの、醍醐寺の湯屋

の限定された性質と、僧侶の位や社会的に高い地位にいる人達の厳しい規則により、ここで新たな中世の入浴文化の性質が生まれました。寺院の入浴におけるこの新たな側面は、湯屋とは、僧侶と社会的階級制を抑制するよりも、その階級制を確立もしくは強化することとなりました。ここに東寺と醍醐寺が特に日本人の風呂文化にもたらしたであろう二つの側面があります。まず一つは「裸の付き合い」という言葉が示すように、入浴は人類としての人間をより親密にさせる場であること。もう一つは、家族や社会、性別、仕事関係の階級制がより強化される場であるということです。

公共の湯屋は、施浴の観念に基づき無料の風呂として始まりました。しかし戦国時代には、入浴料を取る傾向が

出てきました。一度の入浴につき料金を支払うこともありましたが、家族が一日風呂を借り切る予約制度や、湯田地と呼ばれる一括払いもありました。

この場合、入浴の代わりに土地を借り、その土地で出来た穀物を寺院に納めることとなります。ささやかな金額の代わりに誰でも入れる寺湯を開くシステムの登場や、地元の役所の運営による銭湯の出現は、施浴の観念を弱めました。首藤善樹氏が議論しているように、その人気が高まりゆえ、寺の経済は寺湯の入浴料を取ることに依存するようになったのです。つまり、言い換えれば初期の概念にあった僧侶限定だった風呂が、誰でも入れる存在になったのです。寺院では、経済的に入浴料を取ることが必要不可欠になりました。薪を集めたり湯を作る湯那や湯維那、監

視役の湯奉行を含む湯方の部署のような、訪問者の為に湯を準備する担当に任命された修道院の位にあるさまざまの者の存在は、寺湯の商業化を証明しています。逆説的になりますが、清めの文化が仏寺から一般に広がる一方、日本の社会の根底で、入浴の宗教的修行の意味合いが弱くなってきました。

清めの文化はまた、幾人かの僧達によって、癒しという新たな入浴の重要な要素と関連付くようになりました。

真言宗や西大寺系列の叡尊えいそんや忍性にんじょうなどの僧侶は、厳しい戒律と社会での奉仕活動で知られています。奈良の新浄土寺しんじょうどなどの幾つかの律宗りつしゅう寺院は銭湯として客に入浴料を取りました。しかし基本的に多くの律宗寺院では、お金が無く病氣の人に対しては無料で施浴を行っています。付け加えるならば、橋を

建設したり貧しい人々に食べ物をあげる、仏教道の慈善活動に重きを置く医療サービスを施していたのです。北山きやうはつけんど十八間戸じゅうはつげんどや鎌倉の極楽寺のように、僧侶が作った寺院の敷地内の病院や診療所の入浴施設は、清潔で治療効力がありました。例えば極楽寺では忍性が、現在の医療センターの一貫として、特にハンセン病患者の為に、病院と薬草の入浴施設を建てました。このセンターは最高百五十人の患者を収容出来ましたが、治療を求めてやって来る患者の数は、いつもそれを上回っていました。その為、僧侶でありながら医師である彼らは、寺の本堂で治療を行っていました。

実は仏教と癒しは切っても切れない関係にあります。温泉文化に目を向ければ、その事実は日本の全ての温泉二

千カ所以上で見られるのです。

温泉の発見と仏教：癒しの文化

ここまでは、施浴の観念を通じた日本の風呂文化の広がり、現実的問題として大規模な寺院では風呂を建設する為に、詩を購入し設備を整えられる、経済的に余裕のある世帯をパトロンに持つ必要性があったと述べてきました。それゆえ、身体を洗い、ミネラルによって身体を癒せる温泉が地球から無料で湧き出たことは、仏からの贈り物だと人々が思ったとしても驚くことではなideでしょう。実に日本におけるほとんどの近世以前の温泉発見伝というのが、超自然的な動物や鳥、温泉神、仏教の神に焦点が置かれているのです（薬師如来は癒しの仏の代表例ですが、その

他にも地藏や観音、不動なども存在します）。薬師堂がある、もしくは地元温泉に奉納してある神社は、実質的に日本の全ての温泉で存在していると言えます。仏教において、入浴とは第一の柱が清めであるとするならば、第二の柱は癒しなのです。それが日本では、湯治という癒しの習慣に繋がったのでした。人々が治癒効力を期待し温泉につかるという証拠は、古代や中世でも見られることです。しかし温泉の為、大規模な旅行を長期間（七日間の湯治を三回行うのが、昔から薦められていたことです）行う湯治場は、徳川時代に発展しました。ほとんどの湯治場は「聖」と結び付き、前近代日本人は癒しを与えられたのでした。仏教の仏や神道の神だけでなく、僧侶も奇跡的な力を携えていると考えられていたので

した。

真言宗で最も良く知られている僧侶は、弘法大師空海でしょう。歴史的に知られている、弘法大師が実際に全ての温泉を発見したという話は恐らく信憑性が無いと思われるものの、「温泉発見伝」による、弘法大師が発見したと主張する温泉の数が最多だということでは議論の余地がないでしょう。

ミッシェル・スワミンヒ氏 (Michel Soyrie) が中国の例を挙げ述べているように、仏教の僧侶と道教の仙人は往々にして、温泉源を言い当てる超自然的な力がありました。弘法大師のように仏教の僧侶にその傾向があったのは、恐らく前近世の時代に多くを旅する立場にあり、結果、山や水路について詳しくなかったからに他ならないでしょう。それはつまり、彼らが温泉や山に生え

ている薬草、その他の治療に効く自然に力に精通していたという事です。弘法大師が発見されたと言い伝えられている全ての温泉は、実は彼が発見したのではなくとも、真言宗や山伏達が土地の地理に詳しくなつたと考えるのは、恐らく可能なことでしょう。そして彼らが地面のどこから温泉が湧き出ているかを発見した時、発見者を自分が信じる宗派の創始者の名にしたと考えられます。温泉縁起、または温泉発見伝の多くが室町時代後期と徳川時代前期に作られたのと、社寺縁起が作られたのは大体同じ頃です。どちらの縁起にも、名の知られた僧侶が発見者や創始者となるというパターンが見られます。言い換えれば、これらの縁起が歴史的に真実かどうかはさておき、重要なのは温泉や井戸、飲料用の水源は弘法

大師によって発見されたとされていることです。この発見伝により、いかにして水源を発見して使うかを教えられた、東寺の苦しんでいた人々や水不足の地域全体が感動したのです。そして彼らはその思いを、弘法大師をモチーフとして伝えたのです。弘法大師橋の建設や現在で言うところのダム建設などに関わる技術に精通していました。

また腹痛の薬で、高野聖によって全国に広められた陀羅尼助だらにすけなどの漢方を考案するなど、医療にも詳しくあった。つまり彼は、癒し効果のある温泉の発見者としては、完璧な人物像であったという事です。

治癒効力のある温泉の発見伝が、宗派を特定しているのは特別驚くべきことではありません。弘法大師の例で言えば、最も有名なのは伊豆半島にある

修善寺温泉でしょう。伝説によれば、

町の真ん中にある独鈷どっこの湯は、井戸を掘る時に弘法大師が自分の独鈷どっこ（金剛杵こんごうし）を使用した事から、その名が付けられました。現在も川べりに混浴露天風呂として入れる独鈷の湯。弘法大師の伝説の多くは、錫杖しやくじょうもしくは秘密の道具としての独鈷を中心に描かれています。独鈷には水がない場所に水を、もしくはただの水を治癒効力のある水に変える奇跡的な力が込められているのです。修善寺の温泉の場合、重病である父親を治す為に、冷たい川の水で父の身体を洗う子供が川岸にいました。感動し、助けたいと思った弘法大師は、錫杖しやくじょうを使い川の水を温かな治癒効力のある水に変えました。そしてその水でどうやって看護をすれば良いか教えてみたところ、父親はすぐに治りました。

「独鈷の湯」は最も古くからある温泉で、修善寺温泉の大元の源泉として知られていて、「秘湯」の良い例になるでしょう。

仏教の寺院が管理しているこの種の温泉は、有馬温泉、渋温泉、城崎温泉、龍神温泉、日光山温泉など、日本に数ある温泉寺の現象として見られます。(脚注13) 長野にある渋温泉は、伝説によると弘法大師が創始しましたが、曹洞宗の寺が温泉源を管理しています。武田信玄がスポンサーだった渋の温泉寺は、現世と来世に渡ってご利益があった寺として有名です。上に挙げた他の温泉のように、現世利益げんせいりやくのような治癒効力のある水としても機能します。特に刀で切り傷を負ったり怪我をした信玄の兵達が、現在は「信玄の釜風呂」として知られる寺院の葉草風呂に入り

に來ました。その一方で、傷が深刻で亡くなった兵達を來世供養する為、この寺は遺体を埋葬し菩提の供養を行う場所としても、地元で知られるようになったのです。

真言宗や他の宗派が日本の風呂という慣習に与えた影響を、正確に細かく説明することは大変難しいことです。影響はあちらこちらに広がっているからです。しかし長い歴史の中で、独鈷、まんだら、陀羅尼などの真言宗の用語と儀礼、それから弘法大師などの真言宗の僧侶が、日本の風呂文化の中で清めと癒しという概念を普及させたことは間違いありません。

スリランカと日本の末永い交流を祈って

「国交樹立50周年記念」 友好親善使節団・スリランカ訪問



スリランカと日本の国交が結ばれてから半世紀。これを記念して、日頃、国際交流に力を注いでおられる黒田老師が使節団の団長となって友好使節団（主催スリランカ訪問友好親善使節団実行委員会／協賛日本・スリランカ国交樹立50周年記念企画推進委員会）が平成十五年三月、スリランカを訪問します。

桜の木の植樹、記念碑の除幕、交歓パーティーなどの公式行事を通じて、スリランカの人々との交流を図るだけでなく、仏歯寺の参詣、ダングラ石窟寺院巡拝など、貴重なスリランカの文化遺産の見学も含まれています。また、平和祈念集会では「ダルマパーラと日本」と題した黒田老師の基調講演も行われます。みなさんも日本とスリランカの国際交流に足跡を残してみませんか。ぜひ、ご参加ください。

使節団訪問によせて

スリランカ大使からのメッセージ

成寿山善光寺住職で、横浜善光寺留学僧育英会理事長の黒田武志老師がスリランカと日本の外交関係樹立を祝って、スリランカに友好使節団を送る計画を立案中と聞いて大変嬉しく思っております。

駐日スリランカ大使館と、駐スリランカ日本大使館は、この画期的な年に当たり様々なイベントを計画いたしております。当大使館では、両国の友好関係を増進する目的で使節団を派遣することには、優先事項として扱っております。友好使節団は両国の人々の理解を深めると同時に、美しい自然と、歴史上重要な場所を拝見することができます。

私は個人的にも、黒田武志老師の宗教、社会そして文化の各分野での仏教教育と国際的な理解の助長に尽くされた数々の功績を存じあげております。従いまして、私はこの機会に我が国と国民の皆さんに代わりまして、友好使節団の派遣にお祝いを述べると共に、派遣団の成功と素敵な旅であることを祈ります。

平成14年8月吉日

カルナティ ラカ アムヌガマ

趣意書

今年は日本・スリランカ両国にとりまして国交樹立五十周年の記念すべき年になりますが、これは昭和二十六年（一九五一年）九月のサンフランシスコ対日講和条約の締結を承けて翌年、昭和二十七年（一九五二年）四月の条約発効から数えて五十周年目にあたることによるものであります。

この講話条約発効を契機に日本は本格的な戦後復興と国際社会への復帰参入の時代を迎えて今日にいたる平和と繁栄の国創りを実現することになるのでありますがこの五十年の間世界の多くの国々の協力と支援を得たことを忘れてはなりません。

サンフランシスコ対日講和会議においてスリランカのJ・R・ジャヤワルデネ全権代表（のちの大統領）がブツダの慈悲と寛容を説いて戦勝国の驕慢を諫める一方で戦いに敗れた日本と日本国民に対して仏教を奉ずるアジアの友人として日本擁護と日本の完全な独立の必要性を強調されたのであります。

アジアの若い（一九四八年英連邦より独立）小さな国スリランカ（当時セイロン）

の大きな友情のおかげで絶望と荒廢のドン底にあった日本と日本人は不死身のごとく甦ることができたのです。スリランカこそ五十年前友情の手をさしのべてくれた偉大な友人であり大恩人なのです。

翻ってスリランカはかつて「インド洋の真珠」とも「パラダイス・アイランド（天国の島）」とも称揚されてきた花と祈りの平和な伝統は失われて独立後の大半の歳月を経済的苦境の克服に加えて民族紛争と内戦の二重苦に呻吟してきました。永い民族紛争と内戦のスリランカを悲しみをこめて「インド洋の涙」と呼ばれたこともありましたが、今、この民族紛争と内戦に終止符が打たれようとしています。

とき恰も日本・スリランカ国交樹立五十周年を迎えるスリランカが「インド洋の真珠」として甦ることは真に喜ばしいことであります。私共は二十一世紀の関頭に立つ今、この友好親善使節団のスリランカ訪問によって今後の日本とスリランカの二国間交流の推進と発展に些なりとも貢献することを念頭して私共のこれまでの相互交流の経験に学び同時に関係各位のご指導を仰ぎ多彩で内容豊かな訪問日程を試作したつもりでございます。

スリランカ滞在四泊五日という限られた日程ながら参加いただく方々に公式行事の消化はもとより世界遺産の数々の見学、食べ物、宝石、工芸品、アーユルベータ体験療養、伝統舞踏鑑賞等細心の配慮を致しております。

昨今、グローバル化の流れの中で日本でも固有の伝統文化の喪失が危惧されており

ますがこうした面からも参加いただく方々にとりましてスリランカ滞在四泊五日のこの旅行がこれからの人生に大きな指針となる「大きな驚きと大きな発見」の旅となります。旅としますことを確信しつつご参加をお勧めしてお誘い申し上げます。

平成十四年（二〇〇二年）秋

日本・スリランカ国交樹立五十周年記念
スリランカ訪問友好親善使節団

団長 黒田 武志

成寿山善光寺 住職

横浜善光寺留学僧育英会 理事長

趣意書

今年は日本・スリランカ両国にとりまして国交樹立五十周年の記念すべき年になりますが、これは昭和二十六年（一九五一年）九月のサンフランシスコ対日講和条約の締結を承けて翌年、昭和二十七年（一九五二年）四月の条約発効から数えて五十周年目にあたることによるものであります。

この講話条約発効を契機に日本は本格的な戦後復興と国際社会への復帰参入の時代を迎えて今日にいたる平和と繁栄の国創りを実現することになるのでありますがこの五十年の間世界の多くの国々の協力と支援を得たことを忘れてはなりません。

サンフランシスコ対日講和会議においてスリランカのJ・R・ジャヤワルデネ全権代表（のちの大統領）がブツダの慈悲と寛容を説いて戦勝国の驕慢を諫める一方で戦いに敗れた日本と日本国民に対して仏教を奉ずるアジアの友人として日本擁護と日本の完全な独立の必要性を強調されたのであります。

アジアの若い（一九四八年英連邦より独立）小さな国スリランカ（当時セイロン）

の大きな友情のおかげで絶望と荒廢のドン底にあった日本と日本人は不死身のごとく甦ることができたのです。スリランカこそ五十年前友情の手をさしのべてくれた偉大な友人であり大恩人なのです。

翻ってスリランカはかつて「インド洋の真珠」とも「パラダイス・アイランド（天国の島）」とも称揚されてきた花と祈りの平和な伝統は失われて独立後の大半の歳月を経済的苦境の克服に加えて民族紛争と内戦の二重苦に呻吟してきました。永い民族紛争と内戦のスリランカを悲しみをこめて「インド洋の涙」と呼ばれたこともありましたが、今、この民族紛争と内戦に終止符が打たれようとしています。

とき恰も日本・スリランカ国交樹立五十周年を迎えるスリランカが「インド洋の真珠」として甦ることは真に喜ばしいことであります。私共は二十一世紀の関頭に立つ今、この友好親善使節団のスリランカ訪問によって今後の日本とスリランカの二国間交流の推進と発展に些なりとも貢献することを念頭して私共のこれまでの相互交流の経験に学び同時に関係各位のご指導を仰ぎ多彩で内容豊かな訪問日程を試作したつもりでございます。

スリランカ滞在四泊五日という限られた日程ながら参加いただく方々に公式行事の消化はもとより世界遺産の数々の見学、食べ物、宝石、工芸品、アーユルベータ体験療養、伝統舞踏鑑賞等細心の配慮を致しております。

昨今、グローバル化の流れの中で日本でも固有の伝統文化の喪失が危惧されており

ますがこうした面からも参加いただく方々にとりましてスリランカ滞在四泊五日のこの旅行がこれからの人生に大きな指針となる「大きな驚きと大きな発見」の旅となります。旅となります。まずことを確信しつつご参加をお勧めしてお誘い申し上げます。

平成十四年（二〇〇二年）秋

日本・スリランカ国交樹立五十周年記念
スリランカ訪問友好親善使節団

団長 黒田 武志

成寿山善光寺 住職

横浜善光寺留学僧育英会 理事長

■「国交樹立50周年記念」スリランカ訪問・友好親善使節団
訪問スケジュール（3月8日～12日）

日数	日付	曜日	発着地	時間	交通機関
1	3月8日 (2003年)	土	東京（成田）発 コロンボ着	13：20 19：20	UL-455便
2	3月9日	日	コロンボ滞在		
3	3月10日	月	コロンボ発 キャンデー着	13：30 17：30	専用バス(116km)
4	3月11日	火	キャンデー発 ダンブラ着 ダンブラ発 ハバラナ着	09：00 11：30 13：00 13：30	専用バス(72km) (23km)
5	3月12日	水	ハバラナ発 シードワ着 コロンボ発	09：30 13：30 20：45	専用バス(140km) UL-460便
6	3月13日	木	東京（成田）着	11：50	

摘 要	食 事
<p>スリランカ航空直行便でコロンボへ (9時間10分：時差3時間) 《コロンボ・ヒルトンホテル泊 (COLOMBO HILTON)》</p>	<p>— 機内 機内</p>
<p>終日：公式行事参加 ・平和祈願集会 基調講演：ダルマパーラと日本（使節団団長黒田武志老師） ・スリランカ大菩提会、 ジャヤワルデネ文化センター・サルボダヤ運動本部訪問 ・夜：交歓パーティー《コロンボ・ヒルトンホテル泊》</p>	<p>朝食 昼食 夕食</p>
<p>午前中：首相表敬訪問 日本大使館レセプション 夕刻：仏蘭寺参詣 夜：キャンディアンダンス鑑賞 《生活の木ホテル泊 (HOTEL Tree of Life)》</p>	<p>朝食 昼食 夕食</p>
<p>途中スパイスガーデン見学 ダンブラ石窟寺院巡拝 午後：ポロンナルワ周遊(往復80km) 夜：サヨナラパーティー 《ハバラナロッジ/ビレッジ泊(HABARANALODGE/VILLAGE)</p>	<p>朝食 昼食 夕食</p>
<p>早朝：シギリヤ城砦・暁天登行 朝食後：コロンボへ、空港近くのエアポートガーデンホテルへ 昼食・休息。時間調整の後、空港へ 桜植樹グループと合流 スリランカ航空でモルディブ・マーレ空港経由成田へ《機内泊》</p>	<p>朝食 昼食 夕食</p>
<p>入国、通関手続き後、解散</p>	<p>機内 機内</p>

スリランカから50個の角膜が日本へ 日ス国交樹立50周年記念行事が行われる

日ス国交樹立五十周年記念行事の一環

として、スリランカ・アイバンクより五十周年に因んで五十個の角膜が日本の目の不自由な方のために寄贈されます。これに先駆けて、日ス国交樹立五十周年記念企画推進委員会の主催で、十月一日のフェルナンド・スリランカ外務大臣の訪日を機に、スリランカ・アイバンクのシルバ名誉会長らをご招待して、「スリランカ外相訪日歓迎レセプションと角膜寄贈セレモニー」が東京都千代田区の「ジエックストリーム」で開かれました。

■招待者

テイローン・フェルナンド外務大臣一行
パドマ・アイランガニ・シルバ夫人（アイバンク名誉会長）

モハメッド・フセン・シリ・カシーム博士（アイバンク名誉医療部長）

ヘッワ・ワツラゲ・ピヤダーサ氏（アイバンク名誉財務部長）

カルナティラカ・アムヌガマ氏（駐日スリランカ大使）他



ドイツでの「ちかい」

ドイツ大悲山普門寺
アンゼンブッフ禅センター
堂頭 中川正壽老師

このたびは遠方ドイツまで
お越しいただきまして誠に有
り難く存じました。方丈様奥
様からは普門寺立上りの始
めより、つねにご支援を賜っ
てまいりましたが、このたび
のご来独、ご来山に際しまし
て、私どもはそれなりに準備
もさせていたしましたが、
何かと至らぬことが多々あり
ましたであろうことを恐れて
おります。三尊像のご寄進ま
たこのたびの開眼法要も大変

有り難いことでもございました。

日本におかれましては激務
のご日常をお暮らしと拝しま
して、せめてはこのご滞在の
日々をいささかでもお楽しみ
いただけますようにと願って
おりました。各地へご案内さ
せていただきました私どもは、
ご一緒させていただきまして
大変楽しいことでもございました
が、いかがでございました
でしょうか。

普門寺アイゼンブッフはご
覧いただきましたとおり、日
本の方々の絶大なるご支援と
現地ドイツの方々の奉仕と努
力により、当寺もようやく今
日の段階に至ることができま

した。私はドイツに来て丸十年目に『ちかい』として

もろびとの恩を受けてぞこの日あり 報わざらめや生命のかぎり

と詠い、この身に受けた有縁無縁の之恩とそのご恩への未
来永劫の報恩行ということに
目覚めました。それよりさら
に十数年後となります。今日、
さらに一層努めたいと志を新
たにしております。今後とも
ご指導、ご鞭撻のほど切にお
願い申し上げます。

常識ある人間を育てる

磯 紀子様
栃木県

このたびは留学僧による論文集をお送り下さいましてありがとうございます。楽しみに読ませていただきました。人一倍お忙しい中あらゆる方面に気を配られ、また気を遣われておすこしになっていらつしやるにもかかわらず、このような人材育成に心血を注がれていらつしやる方丈さまを心からうらやましく、また尊敬の念でいっぱいです。私ももうすこしで還暦とな

ります。人としてここまでくるまでにはいろいろなことがありました。そうして経験させられ学ばされていろいろとわかってきたことが沢山あります。生意気のようなのですが、人の道がいくらかみえてきたような気がするのです。

世の中何ととっても人間の質が問われると思うのですが、。いつの世でもどのような資源のある国であろうとも、大切なものは謙虚な人間の多くあることだろうと思うのです。この地球上にいるかぎり、どの国の人間であろうとも人間に生まれた意義を知りどう生かしていただくかが大切な

ことだと思うのです。自分だけが良くつても未来の子供達が人間として恥ずかしいものであったなら、私達は何のための子供達を生み育ててきたのだらうかと悩むと思うのです。

良い子供達で一杯の地球になつてくれたら、私達年寄達の幸せな将来が約束されるんですね。日本のみならず全世界で今一番憂うことは、人間としての意義を知った人間が少なくなつてきているということではないでしょうか。

あたりまえがわからない、常識がわからない、正しいこともわからないし悪いこともわからない。その上自分自身

もわからないでいるような気がしてなりません。

毎日、報道される事柄について、私にはどうてい理解しがたいことばかりです。永田町の常識が、我々国民の常識ではなかつたとしたら、どうしてあの政治家の皆さんが国民の代表といえるのでしょうか。つくづく考えさせられる今日このごろです。このような社会にあつて私財を投ぜられ毎年海外へ留学僧を送り出されていらつしやる善光寺方丈さまの、気概をまぶしく感じます。

おかげさまで私も四人の娘を授かり、三人まで良き伴侶

に恵まれ孫もできました。方丈さまにとってはどうてい足許に及びませんが、せめて身のまわりの子供達だけでも身も心も健康で、社会のために何かお役に立つ人間に育つてくれたらと願わずにいられません。私達の天ぷらやも三十年になりました。はじめからこの形態でここまでやつてこられたのが、不思議なくらいです。これも周囲の方々の応援とご先祖さまのご加護があつてのことと感謝しています。

一すじの道を歩き通せますようこれからも毎日願つておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

禅宗の僧侶をめざして

鴉子龍ウツリリウ司シ様サマ
タイ

こんにちは。はじめまして。私はバンコクのワットサケートで出家修行している鴉子龍ウツリリウ司シと言います。二十四歳です。

二〇〇二年十月十三日、タイのナコーンパトム県にあるブッタモントンにおいて黒田住職の『An essence of Japanese Zen』の公演を拝聴しました。とても面白く興味深い話でした。公演の前半を拝聴していると、この僧侶の公演は一体どこに行くのだろう

かと心配しましたが、中盤から後半にかけてはすごい僧侶だと全く考えを改めてしまいました。

私は愛知県にある愛知学院大学の宗教学科を卒業し、曹洞宗については僅かの知識しかありません。永平寺の三泊四日の参禅研修に何回か参加したことがあります。私は一年間、上座仏教の僧侶として修業し出家得度した後、帰国致します。そして此処に来て私の将来は確定しました。ぜひにも禅宗の僧侶になるつもりです。日本の禅宗は曹洞宗、臨済宗、黄檗宗の三宗派。私はまだこの三つの宗派

の生活様式の違いなどについて充分承知しておりませんので、おいおいと三宗派の生活様式の違いを勉強してからどの宗派の門を叩くか決めたいと思っています。(住職さま私のことを覚えておいて下さい。やがて禅宗の僧侶になり世のため、人の為になりたいと念じています。いきなり本山に駆け込んでも僧侶になれるものではないはずですから、できましたらぜひ教えてほしいのですが、どのような段取りをふめば禅宗の僧侶になることができるのですか。

教えて下さい。お願いします。



読者のために

老師「講演録」に深く感銘

東京都
浅草寺清水谷孝尚猊下

この度は「論文集」ご恵賜
下され、誠に有難く厚く御禮
申し上げます。

いつもお届け頂きます「成寿」
で勉強させて頂いております
が今回の御老師の「講演録」感
銘深く拝読いたしました。

御開山椽庵白純大和尚様に
は二十三回忌をお迎えになら
れましたこと、全日仏でお世
話様になり、貧道の師父孝海
和尚とも御縁が深く、いつも
それらの事が念頭にあります。

初めて旅行に参加して

横浜市
鈴木一昭・水穂様

早いもので旅行より帰宅い
たしまして、一週間が過ぎよ
うとじています。旅行中は何
くれとなく、お心遣い下さい
ましてありがとうございます
た。さぞかしご老師さま、奥
さま、そしてお寺の方々には
お疲れになられましたことで
しょう。

初めて参加させて頂いただき
ました旅行が、方丈さま、奥
さまの記念すべき旅であった
ことに、改めて清水寺の貫主

さまの聞法因縁五〇〇生、同席対面五〇〇生という法話を思い出しております。

日頃ご無礼やら、気のつかないことの多い私達ですが、今年、百歳になりました父もおり、ますますお導き下さいますようお願い申し上げます。

とても嬉しかった旅行

横浜市
高橋トミ子様

方丈様この度の旅行、御苦勞様でした。私はとても嬉しかったです。

飛行機に乗った時、奥様やお嬢様方の側に席がありました

た。なんと幸運なんでしょう。私は嬉しくてたまりませんでした。お写真どうもありがとうございました。そうしてスナップ写真を見た時、東郷先生と一緒に写した写真が入って居りました。私は嬉しくて嬉しくてたまりません。あの百万本のバラがまだ心に余韻として残って居ります。本当にありがとうございました。

一心に求めることの重要さ

東京都
林 博明先生

本日は、貴重な『善光寺留学僧育成会』論文集第四集を

御恵送賜りありがとうございます。厚くお礼申し上げます。

此の度は、「先進国社会の弊害と人間性回復」について興味深く拝読しています。

中庸の精神を養い、物質欲や世俗主義を抑え、精神的な心の幸福に主眼を置くべきであると共に、哲学や心理学が求められている。

また、「法の華は人によって開く」黒田老師の一心に祈願すること。

一心に求めることがどんなに重要であるかということをお教えていただき心の宝にしたと思います。

「法の華は人によつて開く」
に教えられ

東京都
角家文雄様

このたびは、横浜市善光寺
留学僧育英会「論文集 vol.4」
をお送りいただき厚く御礼申
上げます。

一週間かけてじっくり読ま
せていただきました。御老師
の「法の華は人によつて開く」
「人材育成と私の使命」には
教えられることが多々ありま
した。

留学僧になりたいくらい

沖縄県
国吉司 凵子様

此の度は貴重な論文集、留
学募集要項を頂戴し、有難く
拝読させていただいております。
私が留学僧になりたいく
らい。論文集もまだ途中で
が読み始めたら面白く、そし
て楽しく愉快で閉じられずじ
まいです。早速お礼状を書か
なくてはと思いつつ三日も過
ぎてしまいました。感謝でご
ざいます。

素晴らしいお仕事をしてい
らっしゃる住職様に敬意を表

します。人材育成という道を
辿りながら、私の場合ままご
とみたいなものですが、お会
い出来た御縁で精進させて下
さいますよう、お願い申し上
げます。

新書は三回以上熟読

京都府
村上博中老師

小子も八十九歳の重年です
が今の処では割合に丈夫らし
いのでポツポツと動いて山務
しております。今では正住
職も、二、三年は実行できる
かと思いつつ暮らしております。

さて、いつもながら特に此の度は高度の論文集 vol. 4 御送付くださいまして、有難うございます。英文も小生教員時代に中学生に英語を教育しました事を思い出しております。お笑い下さい。駒大当時のラウラートルネ女教師のことも思い出しております。

本を読むのは大すきで、ポツポツ読書させてもらっております。大部は論文集で第一回で十日はかかるかなあと思っています。私は新書は必ず三回以上は熟読するくせでおります。

昨春の論文集

滋賀県
佐々木教悟老師

毎号「成寿」をお送り下さいます。誠にありがたく、厚くお礼を申し上げます。

また今回は留学僧育英会の「論文集 vol. 4」をご惠贈下さいます。誠にありがとうございます。ありがとうございました。

尚、昨春は第七回留学僧であった落合隆師（現在チョンブリーのワット・ノンタムルンとチエングマイのワット・プラプッタバートの両方に止住、(両方ともに Meditation

Center をもっています) の著作『ウィパッサナー瞑想・修習の導き』を読ませていただき、マハーブンニョー比丘(落合師の比丘名)のご苦勞のほどを偲ばせていただいたことでした。

帰国を兼ねて遊行の途に

ミャンマー
真野大成様

ご無沙汰を致しております。皆さまお変わりなくお過ごしでしょうか。

さて、こちらは先月二十一日をもって今年の(雨)安居も無事終了し、集っていた衆

僧たちも、三々五々、私寮寺
や故郷の村に向け帰り始めま
した。そこで私も、帰国の前
にさらに幾つかの修行センター
を訪ねておきたいと思い、こ
のたび帰国への旅程も兼ねて、
遊行の途につくことに致しま
した。

十二月十日前後にこちらを
発ち、先ずいまこちらで私の
浄人をして留下来的人が来
年から止住する予定の村に一ヶ
月余り立ち寄った後、来年一
月末からタイへ戻る三月上旬
までは、ヤンゴン郊外の
CHANMYAY YEIK
THAに掛塔をする予定で
おります。



育英会寄付者

滝澤 孝子殿
 鈴木光太郎殿
 安藤 康哉殿
 都築 哲信殿
 釈 満 潤殿
 和田 大雅殿
 中村 秀惟殿
 蓮池 泰乘殿
 北尾 武殿
 島田喜久子殿
 佐々木宏幹殿
 南澤 道人殿
 黒田 征利殿
 渡邊 剛毅殿
 渡邊 清徳殿
 渡邊 孝彦殿

山口 硯永殿
 摩尼 之怯殿
 船越 良光殿
 橋本 恵一殿
 萩野 映明殿
 西村 輝成殿
 都築 哲信殿
 田中 覺禪殿
 館寺 昌晴殿
 桜井 乘文殿
 佐伯 逸惟殿
 小林 貢人殿
 桑原 眉尊殿
 黒田 俊惟殿
 黒田 純夫殿
 加藤 大真殿
 影山 秀和殿
 乙川 良英殿

小川 迪惟殿
 江川 辰三殿
 内山 款偉殿
 今泉 源由殿
 伊藤 至元殿
 一遍 隆信殿
 安藤 康哉殿
 阿部 顕瑞殿
 阿部 一顕殿
 宮林 昭彦殿
 大江 院殿
 松 源 寺殿
 龍 泉 院殿
 井上 葉智殿
 面川 勝怯殿
 村上 博中殿
 福田 道子殿
 成田 泰治殿

沼倉 孝治殿
渡辺 武彦殿
日広石材KK殿
増山 静江殿
園部 逸夫殿
島田崑久子殿
山本喜代司殿
馬場 甫州殿
金田すみ子殿
松浦 玉英殿
大粒来和夫殿
宮田 林彦殿
善 寶 寺殿
佐々木弘傳殿
木村 寅雄殿
高橋 則孝殿
牧田 昭房殿
増田 京子殿

國廣 敏郎殿
平野 國俊殿
池上新太郎殿
〈成寿賛助〉
宮本 延雄殿
芦辺 謙一殿
熊谷豊太郎殿
清水谷孝尚殿
村上 博中殿
渡辺 照夫殿
新城 太治殿
佐々木宏幹殿

平成十四年「成寿山善光寺総代会」行われる

平成十四年度の成寿山善光寺総代会が九月九日善光寺釈迦殿で行われました。第一部に続いて、第二部では、富永事務局長を今回の総代会議長に選出し、具体的な報告、討論が進められました。今回、とくに議題となったものには、来年五月に行われる善光寺開創三十五周年記念行事とスリランカ国交樹立五十周年記念使節団があげられます。

平成十四年成寿山善光寺総代会

平成十四年九月九日（月）午後二時
於善光寺釈迦殿

第二部（一階客殿）

第一部（二階）

一、開会の挨拶ならびに総代会議長選出

一、開式の言葉

二、善光寺ならびに横浜やすらぎ霊園会計

一、本尊上供 導師 堂頭老師

①平成十三年度善光寺第三十三期決算報告

一、総代挨拶

（平成十三年四月～十四年三月）

一、堂頭挨拶

②平成十三年度横浜やすらぎの郷霊園決算報告

一、閉式の言葉

告（平成十三年四月～十四年三月）

三、行事日程

- ① 行事報告(平成十三年九月～平成十四年八月)
- ② 平成十五年行事予定

四、善光守護持会

- ① 会計報告

五、横浜善光寺留学僧育英会

- ① 第十八回育英生(円成・観禅・東燮・晚霞各氏計四名)
- ② 平成十五年度第十九回育英生募集

六、出版

- ① 『成寿』三十四号(十一月発刊予定)
- ② 不動明王暦
- ⑧ 育英会論文集Vol.4(五月発刊)

七、善光寺開創三十五周年記念行事

- ① (案) 日時 平成十五年五月十日

場所 大本山總持寺

- ② 善光寺隣接土地購入の件
- ③ 梅嘉庵(善光寺庫裡)建設の件
- ④ スリランカ国交樹立五十周年記念
友好親善使節団スリランカ訪問の件

八、横浜やすらぎの郷靈園隣接土地購入の件

九、その他

- ① ドイツの普門寺での講演の件
- ② タイ国WFB世界仏教徒連盟本部にて講演の件

十、閉会の挨拶

工事の安全と皆様のご繁栄を祈願して 九月二十五日に行われた梅嘉庵の上棟式

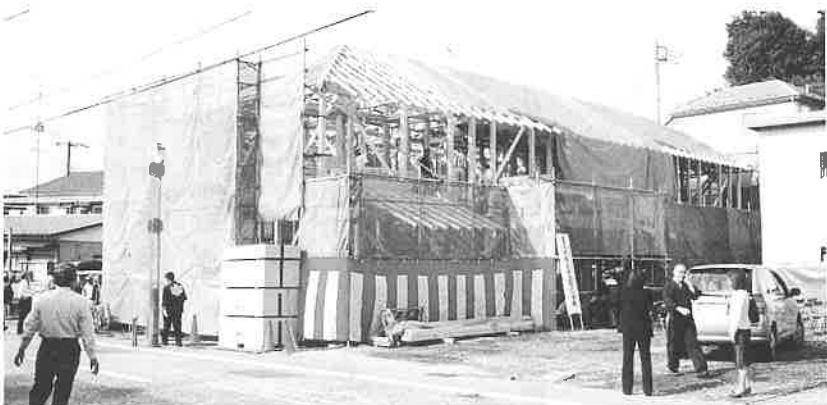
成寿山善光寺ではこの度、隣接する敷地に新しく梅嘉庵を建築することになりました。既に、工事も着々と進み、本号発行の頃には完工も間近になっている予定です。これに際して、九月二十五日、工事の無事を、また、檀信徒の皆様のご健康とご繁栄を祈念して、この梅嘉庵の上棟式が執り行われました。

当日は宗門関係者、檀家代表、工事関係者の皆様にご参集いただき、つつがなく行われま



工事の無事を祈って、敷地に供養の品を埋める黒田老師と工事関係者

した。仏式のしきたりに沿って行われたこの上棟式は、午後三時の入場から黒田老師のお導き





梅嘉庵完成予想図

で「般若心経」「消災呪」「不動明王慈救呪」の誦経とともに、参列者一同の焼香、そして、回向、合掌三拝、鼓鉦三通と続き、約一時間ほどのものとなりました。



ご参列の皆様にあ挨拶を述べる熊谷豊太郎檀家総代と黒田老師

終了後は工事関係者の手によって、工事現場に設けられた舞台の上から恒例の餅撒きがありました。集まった近隣の皆さまも大いに祝いの気分を味わっておられたようでした。



上棟式終了後、集まった地域の皆さんへ参列者から餅が配られました

健康とやすらぎと…同じ目標のもとに

善光寺盆法会で松元密峰師講演

毎年、恒例の善光寺盆法会ですが、今年は『悟りの鍼灸治療』で全国的に支持を受けている松元密峰師をお招きし、『東洋医学と心身の健康』をテーマに、私たちの生き方に興味深いお話を講演いただきました。

松元密峰師は大和郡山市で東西医学を総合した真の医術道場「常祐院」を運営。「真の医術は自然の生命の法則を離れては確立できない」という信念の下に、自然医学の研究とともに人々

の生命力を蘇生させ、自然治癒力を引き出す鍼灸治療を行っています。その独自の施術法は、マッサージ・食事療法をもあわせて、鍼灸を単なる技術から治療システムに体系化させました。さらに、「常祐院」ではレーザー光線治療器などの最新の医療機器を備え、洋の東西をあわせた医学を実践するだけではなく、道場では心技の優れた東洋医術者を養成しています。

講演は六月二十八日の午前の部、二十九日の午前の部、午後の部とあわせて三回行われます。

た。今回の講演でも松元師の臨床から得た貴重な経験や修行の中の過酷な体験から学んだ人間の生命力についてお話しくださいました。横浜だけでなく全国から集まった壇信徒の皆さんも、健康、生き方という身近な問題だけに、食い入るようにお話を聞いておられました。

黒田老師の生き方に共感

講演前、松元師が「生命エネルギーを充満させてその場に臨む」と語られているように、そのお話は静かな中にも迫力にあふれていました。対症療法といわれる西洋医学と、対処療法といわれる東洋医学の壁を越えて、そのバイタリティーで人々に幸福を説いて行く姿勢は自信に溢れ、たゆまぬ人類平和への真理を探究しつつ、とくに「気生命エネルギー」の根源であり、それが「命振動」であることを科学的に立証。その理論に基づく医療とその真価は夙に注目されてい

ます。

方法こそ違っても、黒田老師に通ずるものを受講した皆さんは感じられたようです。松元師自身も黒田老師との出会いに「運命的なもの」を感じられていたようです。「価値ある人生を送る」。この日、松元師の言葉に、大きな希望を持った皆さんも少なくはないでしょう。

松元密峰師

常祐院院主。五歳で母と死別。二十三歳で交通事故により失明。視力を失いながらも、厳しい信實山・玉蔵院での真言宗千日行を成満。鍼灸治療を学び、心と技の伴った東洋医療を実践

35年の歳月を祝い、新たなスタートの原動力に

善光寺開創三十五周年記念行事

平成十五年五月十日・大本山總持寺で開催

お陰様を持ちまして、明年平成十五年、成寿山善光寺は開山以来三十五周年を迎えます。これも偏に檀信徒の皆さま、関係各位のご高配の賜と厚く御礼申し上げます。

そこでこれからも皆様のご期待にお応えできるよう、皆様とともに祝う開創三十五周年記念行事を瑩山禪師ゆかりの曹洞宗大本山總持寺で実施させていただきますことになりました。

お忙しいところとは存じますが、万障お繰り合わせの上、ご参加賜りますようお願い申し上げます。



總持寺の三門

●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●● 板橋大禪師初の訪タイ

釈迦牟尼佛正伝の袈裟の世界への普及を目的に活動を行っている「釈迦牟尼佛正伝御袈裟普及協会」では、「タイ国仏教交流会」として、六月二十五から二十八日までタイを訪問した。

今回のタイ訪問では、大本山總持寺貫首板橋興宗大禪師猥下が直々にタイを訪れ、タイの仏教会に袈裟を贈呈した。板橋禪師のタイへの訪問は初めて。これは山形の井筒屋の発願に、留学僧の交流をはじめ、さまざまな分野でタイの仏教界との交わりの深い善光寺の黒田武志住職の全面的なバックアップがあつて実現した。

贈呈式は二十六日に行われ、その後、タイの仏教会と交流が持たれた。なお、今回の訪問には、總持寺からは阿部、三村両副監院をはじめ、五十名を超える随喜も訪タイ。

ニ ュ ー ス ・ ア ラ カ ル ト

今後、ますます深められる總持寺とタイの仏教交流に期待を寄せる声も多い。

●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●● 青少年教化の場

京都府宗務所(村上俊鳳宗務所長)は七月二十五日と二十六日の一泊二日で、青少年研修会「夏休み子供、比叡山延暦寺研修会―道元禪師得度靈跡・琵琶湖博物館見学の旅―」及び現職研修会を実施した。若手僧侶に青少年教化の場を提供するのが一つの目的で、合同行事となった。したがって初日の開講式・天台声明・野外散策、二日目の坐禅・朝課・青少年向法話(講師＝クリス・スタブラキス氏、辰巳款道氏)・閉講式は共通行事。現職研修会の独自行事は講座や人權学習など。同講座は横浜・善光寺の黒田武志住職を講師に迎え「寺院経営について」のテーマで行われた。同宗務所と黒田住職は昨年

末の京都・清水寺に建立された瑩山禅師の碑が縁で交流が深まった経緯がある。人権学習は京都府舞鶴市・永春寺の諏訪龍天住職が講師をとめた。青少年研修会については、京都府青少年教化協議会（野原泰見理事長）が企画運営を担当、小学校高学年から中学三年生までが対象の行事で、今年度は食事作法や坐禅体験、道元禅師得度霊跡への参拝など盛りだくさんの内容だった。

ドイツ普門寺にて講演

黒田住職は八月三日、四日にドイツのアイゼンブッフ禅センター（大悲山普門寺）で開かれた「DOGEN 二〇〇二 高祖道元禅師七五〇回大遠忌記念ゼミナール」に講師として招かれ、「道元思想から見た現代社会へのアプローチ」と題して講演し、パネルディスカッションに参

ニユー・ス・アラカルト

加した。

普門寺は平成八年に禅センターとして活動を開始し、開山に永平寺の宮崎奕保貫首を拝請。主監の中川正寿氏は慶応大学哲学科の出身で、ドイツに渡り摂心指導と道元禅の普及に身を挺している。

黒田住職は「修証義」を通して道元禅師の教えを話し、自らの修行遍歴と育英事業の意義を語った。

黒田住職を驚かせたのは、パネルディスカッションでドイツ人が「修証義」第十七節を読み上げ、「これは一体何を言っているのか」と質問したことだった。黒田住職は「今ここにいるドイツ人が求めているのは学問としての修証義ではない。実践の書としての修証義の世界を知りたいのだ」と直感し、「如実知見、欲望や固定観念を捨てて、その姿をありのままに見ることこそが悟りであり、発菩提心である」と答え、満

場の拍手を浴びた。

世界は仏教に何かを求めている。仏教は何を世界に与えることができるだろうか。

黒田住職は「曹洞宗の僧侶は道元禪師さまから素晴らしい教えをいただいている。あとは修証義に書かれていることを限りなく実践することだ。七百五十回大遠忌に際して私たちが確認すべきことはこのことであり、ただ遠くを慮るだけではなく、そこに道元さまがいますが如く、そのお心をいただき、理に従い、ただ実践する。高祖さまからその促しを受けているのだと心底知ることだ」と述べた。

●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●● タイで禪を語る

横浜市の善光寺住職黒田武志氏は十月十三日にタイ・バンコク郊外にあるブツダモントンの国際会議場で日本の禪についてスピーチした。

— ニュー・アラカルト —

世界仏教徒青年連盟(WFBY)の招請によるもので、当日はタイ国内の大学生や教師、僧侶らが集った。

上座部仏教のタイで日本の僧侶を招いて日本仏教の話聞くのは極めて異例のことである。これは黒田住職が三十五年前にタイのワットパクナムで安居修行して以来、積み重ねてきた交流と信頼関係の裏づけがあつたことだが、それだけではないと思われる。

タイ仏教が日本の仏教に関心を寄せる背景には、タイ仏教の現実があり、大乘仏教から何ものかを学ぼうとする意思が働いているとみられる。

●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●● 伊勢神宮まがたま祭に参詣

伊勢神宮まがたま勾玉会が「伊勢神宮まがたま祭」を開催してから今年で四回目を迎えた。今年の「ま

山梨県大月市初狩の瑞岳院で四月一日から七日までフランスのバシユルス浄信師を始め、その門弟二十名が摂心を行った。滞在期間は十日間で摂心終了後は横浜善光寺を訪問し黒田方丈の案内で鎌倉の報国寺、杉本寺、円覚寺、鶴岡八幡宮、長谷観音を訪れ十日に帰国した。バシユルス浄信師は横浜善光寺留学僧育英会の第四回（昭和六十三年度）留学僧で元はフランスのジャーナリストとして活躍した。

— ニュース・アラカルト —



お釈迦様に甘茶をかける浄信師の門弟

横浜善光寺
留学僧育英会

The Yokohama Zensho
Scholarship Foundation for
International Buddhist Study

論文集
Vol.4



成寿山善光寺

横浜善光寺留学僧育英会の 『論文集 Vol.4』

若き留学僧の 真摯な情熱と理想を綴る

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長、横浜市港南区日野中央一ノ一二ノ九・曹洞宗善光寺内）が仏教興隆と世界の進運に貢献する人材

を育成しようと、国内外の若い仏教徒を支援しつづけて十八年になる。海外に留学僧を派遣し、また外国からの留学僧を受け入れるという育英活動で今日までに育てた留学僧は百六名、関係国はアジア欧米を含めて二十カ国一地域、派遣国は十四カ国にのぼる。留学僧たちが志願時に提出した論文は『論文集』として出版されており、ことし第四集が刊行された。

論文からは、若々しい情熱と理想に燃える留学僧たちが、二十一世紀の仏教と自分についてや、留学僧として何を学ぼうとしているのか、これからの国際社会と仏教の役割などについて真摯に問いかけ、答えようとする姿勢がストレートに伝わってくる。つい仏教の悲観的な側面に目を向けがちになる現実の中で、論文集は明日の仏教への希望を抱かせてくれる。

日本印度学仏教学会理事長の前田専學氏（東京大学名誉教授）は、序文に「若く、柔軟で、

知識欲・好奇心ともに旺盛な時代に留学することとは筆者の経験からいってもきわめて大きな意味を持っております」と述べ、筑波大学名誉教授の三枝充恵氏（東方学院院长）もまた、母国を離れて海外で暮らす留学体験は「その人の生涯を通じて深刻にきざみこまれ、ほぼその人の一生を決定する」とし、そのように貴重な人生の契機に奨学金を送って援助するという快挙を実行・継続している黒田理事長に満腔の敬意を捧げている。

しかし第四集の読みどころは、「法の華は人によつて開く」という黒田理事長の巻頭言であり、また社団法人日本能率協会で行なった「人材育成と私の使命―道元禅師の発願利生の現代的体現―」と題する講演録であろう。そこには黒田理事長の「発願利生」の源泉となるギリギリの修業体験が赤裸々に語られている。それは仏道を求め、自己を求め、そして自己を忘れ、つい

には方法に証せられていく一求道者の歩みにほかならない。

頒価二、〇〇〇円。成寿山善光寺刊。編集・

印刷は中外日報社。

（平成十四年十一月十四日付の中外日報より転載）

Foreword

The chief priest of Zenkōji—Temple
Takeshi Kuroda

“Learning Buddhism means learning oneself”.

This is the quotation from “Shōbōgenzō” by Rev. Dōgen, who preaches us that when we learn Buddhism, we learn ourselves. Rev. Dōgen once said, “I learned flexibility there”, just after returning from China and wrote this flexibility was the most important must-do’s for human beings.

The human beings tend to think prepossessed with fixed and preconceived ideas or prejudices, and often make mistakes not noticing the facts they are making mistakes. I care about people will loose even their noble minds because of the recent diversity or the dilution of values. We are preached that learning the flexibility of Rev. Dōgen is equal to learn the prajna, supreme wisdom by which we can solve the fundamental problems of our lives.

My belief as a Buddhist is “going back to Buddha through the founder of the Sect” since the foundation of Zenkōji temple. I have devoted my heart and soul to “here and now” in this year. I paid a visit to the head temple Eiheiji before the big ceremonies, the commemoration of the 800th year since Rev. Dōgen’s birth and “Daionki”, the 750th memorial service since Rev. Dōgen’s death. I offered tea and sweets and I felt as though Rev. Dōgen had been beside me, I was very moved to be appointed as “Shōkōshi”, who burns incense for the memorial service. It was really more honor than I deserved and unforgettable all my life that I could carry out this memorial service with 100 supporters in peace.

I was awarded the Sōtō-sect Special Encouraging Prize, named for an assistant “Daikyōshi” and the great feast was held for me. I was invited to the seminar “DOGEN 2002, the memorial seminar of 750th anniversary since Rev. Dōgen’s death”, sponsored by Zen Center in Eisenbach Germany and I gave the lecture about “Shoshūgi” centering on the approach to the contemporary ideas from the thoughts of Rev. Dōgen. In the panel discussion, I felt all the more keenly in Germany, the great truth of Buddha’s teaching, “Shogyōmujō, all things are in flux and nothing is permanent” and his great view of the world beyond borders, races and religions. Then, having been visited to Buddhathon in Thailand by World Fellowship Buddhist Youth (WFYB) in October, I gave the lecture about the Buddhism in Japan and the Sōtō Zen founded by Rev. Dōgen to the supreme Buddhist leader and many young priests. I cannot forget their beautiful eyes. Having seen their big responses there, I could not help thinking the 21st century’s messages from “Shikantaza, Zen sitting meditation” by Rev. Dōgen began to go back in the propagating route of southern Buddhism.

In this year, I feel like everything begins and ends in Rev. Dōgen. The 35th anniversary since Zenkōji temple’s foundation will come in May 2003. “Ikueikai, scholarship foundation” also will become 20 years old, which is adulthood. This means the big turning point for our supporters and me. “Blossoming flowers are same year after year, though not human beings”. We would like to pray each other for our unlimited prosperity and happiness of our rest lives and posterity in the future, and also to see the new year with devoting to the pursuit of our faith more and more to perform our mission through great Buddhism.

編集後記

▼「成寿」第三四巻をお届け申し上げます。黒田方丈はドイツのアイゼンブッフ禅センター主催の『DOGEN二〇〇二高祖道元禪師七五〇回大遠忌記念ゼミナール』に招かれて講演いたしました。ディスカッションではニーダーアルタイヒ修道院長のユングクラーウセン神父が加わり参加者と一体となり白熱した質疑応答が繰り広げられました。

▼十月十三日、世界仏教徒青年連盟、タイ仏教会、世界仏教徒連盟本部の招請でタイ・バンコク近郊のブッダモントンにて「日本の大乘仏教」と題し講演を行いました。タイ僧侶の澄み切った瞳に心の隅々まで清められた方丈は参禅指導までされ、その

様子がグラビアに掲載されております。

▼佐々木宏幹先生、小倉玄照老師、伊藤博先生、第五回留学僧の引田弘道先生、第十四回留学僧のウイリアム・ダンカン先生からご寄稿いただきました。ダンカン先生は仏教と温泉の歴史を取り上げ興味深いレポートとなっております。ご一読ください。

▼檀信徒の皆様と永平寺に拝登し無事七五〇回大遠忌の焼香師をつとめ上げることができました。ひとえに皆様方のおかげと心から感謝申し上げます。また清水寺にお寄りした際には森清範貫主猊下から御講義を賜り昨年の感動を新たにしました次第です。

▼明年三月にスリランカ国交樹立五〇周年記念友好親善使節団の団長として方丈がスリランカを訪問いたします。本文中に趣意書を掲載してご

ざいます。皆様のご参加をお待ちいたしております。

▼おかげさまで明年は善光寺開創三十五周年になります。五月十日に大本山総持寺で記念式典を開催いたします。一人でも多くの方にご参加願いと存じます。

▼明年は新年会が十一日、節分会が二月三日、春彼岸会が三月十八日となっております。皆様おそろいでまいりください。どうぞ良いお年をお迎えください。

成寿 第三十四巻

平成十四年十二月一日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目

十二番九号

電話 〇四五(八四五)一三七一

FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 神奈川新聞社出版局





横濱善光寺